虚飾虚栄者は独よがりのうつけ者と契約しました

天馬　龍星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
虚飾虚栄者は独よがりのうつけ者と契約しました

【Ｎコード】
Ｎ３０３５Ｚ

【作者名】
天馬　龍星

【あらすじ】
二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、東京は日本から隔絶された。堕ち神を閉じ込めるために萌え文化が栄え、統一教会東京大学が創立された。東京は七区に分け割れた。
狭間区第一高校等学校に通う、高校三年生の天海翼は自己中心的で人の話をまったく聞かない上に、いつも傍若無人な物言いで相手を困らせている問題児で、オタクで幼女好きで魔法少女を愛している、救いようのない変態だ。そして火竜焔は法律で禁止された科学

を扱うマッドサイエンティストで天海翼と同じくらい危険な存在だ。
一二月二四日、天海翼は秋葉原に姿を現し、一人の少女と出会ってしまった。その出会いは必然だったのかもしれない。彼女の出会いが天海翼の運命を大きく変えることになる。彼女は兵器で名をスピカといい、男性の血液を摂取することで、いかなるものでも創造することできる。しかも、最近この東京で流行っている萌えアニメ、魔法少女シリアに瓜二つで、さらに魔女が現れ、襲い掛かってくる。血の契約を交わすことで、エロゲーを剣に変える力を手に入れ、撃退するが、巡回中のお巡りさんに捕まってしまう。罪名　幼女誘拐および強制わいせつで拘置所に送られることになった翼は、組織の一員になることを決意する。教会でスピカと再会した翼は、組織から依頼を受け。秋葉原に調査に行くことになる。焔も翼と同じように契約を結び、特殊な力を手に入れていた。スピカの力を借りることで、焔達を追い詰めていくが……スピカはカオスへと姿を変えてゆき、翼に襲い掛かってくる。スピカを護れなかったことを悔んでいる時に、白山が現れ、翼にエロゲーを渡され、それを剣に変えることで焔を追い詰めるが、止めを刺すことはでなかった。悩んでいるうちに状況は悪化していき。最終的にはカサンドラが止めを刺すことになる。そこに死んだはずの父一心とアイリスが現れ、焔達を連れていてしまう。残された翼はカサンドラからイヴのこと聞かされる。イヴとは翼が幼い頃に出会った、初恋の女性で、始まりの書を託してくれ人でずっと捜していた人物だ。カサンドラと別れた後、またアイリスが現れ、見せたいものがあるというのついていくと、スイセンを見せられた。夢を見た翼は、思い出の少女イヴを具現化させてしまう。シスターカレハから……イヴ誕生の真実を知り、強くなるために次の任務へと向かうのであった。

第1話（前書き）

とてもおバカな内容になっております。
おバカなものが腹立たしい方はお読みにならぬ方が賢明です。
おバカを愛でられる心の広い方だけお読みください。

第1話

白いベッド上座りながら、窓の外を眺めている黒髪のサラサラロングヘアの女性は、ピンク患者衣姿でいる。壁は白く清潔感があり、たぶんここは病室だろう。ベッドの横に椅子を置いて座ったいる紺色のスーツをびしっと着た男性は、お見舞いに来た人だろう。随分と心配そうな顔をしながら、顎髭をなでている。

「あの鳥は、どこへ向かって飛んでいくのかしら？」

「俺達の手届かない、ずっとずっと遠くまでだろう」

「そうよね、空が続く限り、どこまでも……飛んでいけるわよね。もし、翼があれば――あの子を助けられたかもしれない。あの子の気持ちを少しはわかってあげられたかもしれない。でも、わたしにはどうすることもできなかった。だからこれは――――罰ね」

「なぜ、キミが罰を受ける必要がある。この世界に、神なってものが存在することじたいが間違っているだ。終わりをもたらす神なって俺達は望んでいなかった。ただみんなが幸せに暮らせる世界を作るために――――なんで……どうしてこうなってしまったんだ」

「お願い、彼女責めないで……一番悲しんでいるのは彼女だと思うから。鳥籠の中に閉じこめらた鳥でも、翼があれば大空を夢見ることができるけど――――彼女もう、翼がないから――――二度と飛ぶことはできないの？　彼女は必死助けを求めている。彼女の悲しみ、苦しみが歪（ひずみ）を生み、世界をどんどん歪（ゆが）めていく――このままではとりかえしのつかないことになるわ。だから――――」

「ああ、求めるもが形あるものとは、限らない。未来とか希望でもいいだ。曖昧で不確かで不完全なものかもしれない。だからってお前を一人を死なせるわけにはいかない」

「ああ、気持ち良い風……もし私が鳥だったら、間違いなく大空を自由に飛べ回っているわね。そうだ！　この子の名前は、翼（つばさ）にしようと思います、意味は可能性。あの鳥の自由に生きてほしいから。

わたしみたいに何にも縛られてほしくないの。そして最後まで自分の意志を貫いて欲しいんです。あなたはそれでいいですか」
「ああ、俺も気に入った。だからあまり無理に力を使うな。俺が必ず運命を変えてやる。この子のためにもな。それに生きてさえいれば、大抵のことはどうにかなるものだ」
「やっぱり、あなたは優しいわ。でもこれは私にしかできないことだから……もう少しだけ、無理をさせてお願い」
「わかったよ、どうせ止めても聞かないんだろう。なら、好きにすればいいさ」
「ありがとう。もし私が死ぬことになっても、私が見たことは誰にも話さないでください」
「わかった、誰にも言わない。だけど忘れるわけじゃない。大丈夫、俺とお前の子だ！　どんな過酷な未来が待っていようと決して負けないさ、乗り越えて行ける強さを持っているはずだ」

第2話

またこの夢か？　最近よく見るようになった不思議な夢。　校長の話しがつまらなくて眠ってしまったようだ。椅子から立ち上がり伸びしてから、出口に向かって歩いていると

「昨日の魔法少女シリアみたか？」

「見た見た、今回も萌え萌えな展開で、ドキドキしたぜ」

黒髪のひょろい男が、眼鏡をかけたオタクぽい男性に声をかける。オタクぽい男性は満面の笑みを浮かべて楽しそうに答えている。二人とも紺のブレザーを着たここの生徒で、興味深い話し声が聞こえてきたので足を止めて耳を傾けてしまう。

「蒼髪にロングヘアとか、最高に萌えるよな」

「ああ、あの風で髪が靡く所がチャーミングだよな。あのネコみたいに大きい眼と愛らしい声も萌えちゃうよ」

「なかなか、お前わかってるじゃないか？　ミニスカ、黒ニーソがまた痺れるんだよな」

「そうそう、あの絶対領域は堪らんな。しかもあの上品そうな白いブーツの破壊力は萌え死ぬほどだ」

「その気持ちわかるぜ。やっぱお前とは気が合いそうだな」

彼らが話しているは今話題の萌えアニメである。ここ東京では絶大な人気を誇っており、数多くのグッズ発売されている。

また、いたるところでポスターや看板を目にする。シリアグッズ専門店やシリア喫茶まで、できる始末だ。俺っちの名前は天海翼（てんかいつばさ）、魔法少女シリアの大ファンにして筋金入りの二次元信者。リアルな女などに興味はない。シリアちゃん一筋で生きてきている。その熱の入れようは世界一だと自負している。萌え都市として栄えている東京すら、俺の居場所は無く異端視されろほどの完全無欠自己中オタクなのだ。

ロリコン幼女好き、変態などと罵倒されるわ。女子からの人気が

なく軽蔑の視線が向けられ、男子もウザイ、キモイとか言われる始末だ。
　二人の会話はヒートアップしていて、思わず声を発してしまった。後ろから二人の間に割り込む感じで思い切り叫んでしまった。
「貧乳って最高だよね、何か禁断の果実みたいで。特に幼女は素晴らしいよ」
「なんだ、コイツは俺達の会話に勝手に入ってきやがって。なんて空気の読めない、自己中な男だ、信じられん」
　いらだった顔つきのひょろい男が、腹部めがけて大振りなパンチが飛んでくる。完全に頭にきているようだ。目が血ばしているが、ひるむことなくその拳をかわし、蹴りをくりだす。腹を五センチほどめりこませ、くの字がったになって腹を抱えて、顔を歪めながらその場に倒れ込んだ。
「この傍若無人態度に、よれよれのダイサイ制服。ミスターヘータイーーーー」
無言で思い切り殴りつけ、空中を三回転くらして壁にぶつかり倒れたのを確認して、辺りに睨みを効かせ黙らせている途中で視界が暗くなり、力が入らずその場に倒れた。一瞬何が起こったのか、わからなかったが。
「おい、やり過ぎだよボケ。死人がでるだろう、少しは手加減しろよな」
この一言を聞いてすぐに何をされたのか、わかった。
「貴様、また変な薬をうちやがったな。このマッドサイエンティストめ」
「人聞きの悪いこと言うな、ただの興奮を抑える薬で人体に害はないはずだ」
（絶対ウソだ、コイツがそんな普通そうな薬を作るわけがない。俺っちは騙されぞ）
　マッドサイエンティストの登場で周囲のざわめきが大きくなる、みんな彼を恐れているのだ。萌えで栄えている場所に住みながらの

萌え嫌いと言うか、オタク嫌いのイカレタ男を――――沈黙の空気を打ち破るように誰かが叫び出した。
「白衣を靡かせているあのイケメンは、火竜焔（かりゅうほむら）。この錬金術の時代でもなお科学を貫き通す姿勢を変えない、もう一人の異端児」
二〇一八年、科学万能の時代は終わりを告げる。相次ぐ環境問題さらされ、その被害は甚大（じんだい）で、日本の国民、いや、全世界において疲弊しきっていた。
しかし科学者達は解決策も講じることができなかったのに対し、教会の対応は迅速かつ完璧なものだった。国民の支持された教会は実権を握り、信仰学の義務化と環境に悪影響を及ぼす科学技術の廃止を推し進め。それらが法律として認められ、全日本国民適応されて、全国の学校では信仰学の義務教育が行なわれるようになった。
科学が異端の学問になり、いつしか、マッドサイエンティストと呼ばれるようになった。科学者たちは、信仰学者と名前を変えることを余儀なくされた。
信仰学とはアルネシア神を信仰し、神の力の使い方を学ぶものである。
日本国民よって、信仰学は細分化され、次々新しい分野が開拓され、日常生活に溶け込んでいた。そして東京に浸透した信仰学は、萌えという感情を信仰する学問と好奇心を信仰する学問に別れた。
「よくもやりやがったな。貴様こそ俺っちを殺し気か、変な薬をうちやがって」
薬の効果も切れ、立ち上がると同時に啖呵（たんか）をきる。
「なんだやる気か。いいぜ、お前との因縁もそろそろわらせたいと思っていたんだよ」
「ヤ、ヤバイ！　奴等またここで死闘を繰り広げるつもりだ。逃げるぞ、巻き込まれたらそれこそ死ぬ。俺は逃げるからな、お前らも早く逃げたほうがいいぞ」
そう叫びながら、腹を抱えてひょろい男は体育館から姿を消した。もう一人男は倒れたまま動こうとしない。そして焔に殴りかかろう

としたら、担任の樋口(ひぐち)が割って入ってきた。誰かが先生を呼びに行ったのだろう、全く余計なことをしやがって。
「また、お前たちか。毎日毎日問題を起しおって、馬鹿者どもが。冬休み返上で学校に来い。その腐った性根を叩き直してやる」
「待ってください、先生。俺達はケンカなんかしていません。終業式も終わったし教室にカバン取りに行こうぜ、と声をかけただけです、なあ、つばさ」
「親友とケンカするわけないじゃないですか。ボク達はカバンを取りに教室に戻るので失礼します」
「おい、待って話しはまだ終わってないぞ」
樋口が何かを叫んでいるようだが、気にしない。体育館にたくさんの生徒が残っており、みんな楽しそうに友達と話している。所々で小競り合いを起こしているので、その対応に追われているため簡単に体育館を抜け出すことができった。
(どうやら、俺っちはコミュニケーション能力がゼロらしい。よく話しかけても無視されるし、さっきみたいにうまく会話の中に入ることができない。だから話し相手はいつも焔だけになってしまう。本当はみんなと仲良く話しないのに)
教室前の廊下一面に貼られた萌えポスターを見て俺っちは、東京が萌えに侵食されいることを実感した。
二〇二三年(当時五歳)、奴等は何の前触れも無く現れ、分身とも言える神を結晶化させ喰らっていった。神を喰われた者は、心を無くし奴等に隷属した。
父も俺っちも神を信じてなかったから、結晶化されることなく助かった。
神を信じてない人が集まり、教会に反旗を起こした。
理由は至ってシンプルである、教会の生み出した神が災いの種だからである。
暴動が起きるなか父は教会から仕事を受け、奴等の正体を暴くために戦って死んだ。

父の死をいたんだ、多くの科学者が無念を晴らすために立ちあがってくれた。
そして個体数をだいぶ減らした奴等は人間に擬態し、人間社会にまぎれこんでいった。
しかし父は無駄死にしたわけじゃなかった、優秀な科学者達のおかえで、彼らが百％と萌えエネルギーで出来ていることと、萌えエネルギーに引き寄せられていることがわかった。教会は堕ち萌え神という命名し、一箇所に集めるために東京全土を萌え都市に作り変え、萌え神だけを信仰することを約束した。
さらに万全を期すため東京を出る者を無差別に殺す機械を設置して完全に隔離した。
「つばさ、そんな所に突っ立ってないで！　早く来い」
廊下にまで響く焔の声が聞こえて、急ぎ足で教室の中に入ると、窓際の方で制服の上に白衣を纏って気取った男が目に入った。他に生徒はいないようだ。自分の机に向かってカバンを取ろうとしたら、唐突に話し掛けてきたので振り向いた。
「ちょっと相談したいことがある。人前じゃ言えない話なんだけど聞いてくれるか？」
「お前が俺っちに相談するなんて珍しいな、いつも偉そうなのに。で、どんな相談なんだ」
「教会の奴らに、堕ち神対策技術者としての誘いを受けた。近々堕ち神を根絶やし作戦が行なわれるため優秀な技術者を探しているらしい」
「確かにそれは人前で言える話じゃないな？　そんな重要なことを何故、俺っちに話した。しかも教会って？　統一宗教ことか」
「ああ、そうだ。そこで巫女をやっているイヴという少女について知りたい。
あとこれはチャンスだ、奴等を根絶やしにできる上に、心を無くした人達を救う方法がわかるかもしれない。なんせ教会の技術力は世界一だからな」

この世界には人の数だけ神が存在している。九十一年前の宗教統一戦争で、パンドラという女性が神を顕現させ、戦争を終わらせたと授業で習った。
今もイヴという巫女が新しい生命が誕生たびに神を顕現させているが――――
俺達には、神を顕現されていない、信仰心がないからだ。信じる気持ちが無ければ神は顕現されないみたいだ。それが異端視されるもう一つの理由だ。
また、願いを叶える時のみ姿を現し、普段は身体の奥深くで眠っているらしい。
人が死ぬと神も一緒に消滅するが一般的だが、神を喰らう神、堕ちた神というもの存在する。イヴが堕ち神を創りだしているという噂もあったが、教会は全面的に否定している。
なぜ、萌えという感情が堕ち神になりやすいのか、それは謎の多い感情だからだと教会の科学者は説明していて、イヴが関与していることは認めていない。
焔の両親は神に心を喰われ、奴等のしもべになった。
もし助ける方法があるなら、俺っちも協力したい。堕ち神だけでなく、神の存在自体を恨みながら生きてきた、それこそ、全ての神を殺したいぐらいに怨んでいる。だから焔の気持ちはわかるつもりだ。だが、教会の手は借りたくない。しかし、その技術には興味がある。
「それを知ってどうするつもりだ。まさか教会に手を貸すつもりか？」
「はぁ、なわけねえだろう。俺が宗教に力を貸すことなどありえない。潜入だよ、潜入。敵のアジトに潜り込み中から破壊工作をする。少し考えればわかるだろう」
子供を諭すように喋り出す、そのふてぶてしい態度がむかつきつつ、納得の笑みを浮かべて、頭を掻きながら情報を整理し、必要最低限のことだけを述べるように努める。
「わかった」

「わかったならとっとと教えろ」
焔はとても険しい顔をで注射器を向けって、全身から教えなかったら殺す的なアレを出して脅(おど)してくる。とても人にものを頼む態度じゃない、生唾を飲み込みながら、はきはきと喋りだす。
「知っていることを話そう、イヴの伝説は知っているよな。そのイヴの遺伝子を元に創られたパンドラだ。パンドラ遺体の側で見つかったのがイヴだ。なぜイヴと呼ばれているかというと神を顕現させ、全て神を従えることができるからだ」
「一体どういうことだ、なぜ従える力も持っている。パンドラ以上のことができるというのか？　ちゃんと質問に答えろ」
　注射器をしまい、襟元を掴んで詰め寄ってくる。慌てて答えるが今度は嫌味な感じで叫ぶ。コイツの態度にむかついてきたからだ。
「統一戦争後、パンドラは始まりの書を所持したまま姿をくらました。そしてイヴという少女が保護され、パンドラの遺体が見つかったのが十三年前。堕ち神が現れた時期と重なる。詳しいことは教会の人間に訊かないとわからないけど。イヴは魔法術師で、パンドラが、自分の遺伝子を改良して生み出した者だから、全て神を支配することができた」
「その話が本当なら、イヴが堕ち神を創ったということになる。なぜ、そんなことをした。まさか教会を潰すためか？」
「ああ、そうだろう。魔法術師とは、本来秩序を破壊する存在だからな」
「魔法術師ね。まだ、そんなこと考えていたのか？　まあてめえらしいか、でも俺は魔法術みたいなオカルト系は信じない。堕ち神の原因は科学的に調べるさ。
　でも、気になるなパンドラが教会を抜け出して遺体が見つかるまでの七十八年間の空白があるのか。
教会の教えを素直に信じるのは危険だ。パンドラという女の素性がわかっていない」
　どこか納得したような顔をして、襟元から手を離し、びしっとか

っこつけて叫んできたのを聞いて、同類だと思った。
「お前こそ、いつまで科学にこだわるきだよ。今は神を信仰する時代だぜ。お前も変わらないじゃないか、俺っちは科学よりも魔法術を信じているだよ」
「そうかもしれないな。俺は科学一筋でてめえは魔法術の道を究めればいい。もう同じ道は歩けないのだから――――」
「俺とお前じゃ、目指すものが全然違うからな。道を違え、今は敵同士だが、いつか分かり合える、友達になれると思っている」
「そんなことはありえない、もっと現実を見ろよ。昔とは違うんだよ。萌えオタは大嫌いだ、俺は俺のことしか信じない。もう裏切られるはたくさんなんだ」
「まさか、黙って引っ越しちゃったことを怒っているのか、なら誤解だ。お前を裏切ったわけじゃない。仕方ないことだったんだ、信じてくれ」
「信じろ、何を信じろというのだ。何も知らないくせに調子のいいことばかり、てめえを見ていると虫唾が走る。俺がどれだけ苦労して特待生なったかも知らないのに、偉そうにほざいてんじゃねえ」
「まあ俺達は、学校だけの関係で、立ち入った話しはしたことがないからな」
「学校以外の時間は全部研究に費やしている、馴れ合いは嫌いなんだ。それにオタ活動なってキモイことはやらない、萌えオタなんてみんな死んでしまえばいいだ」
「だから教会の誘いを受けるつもりなのか？　萌えオタを全滅させるために」
「ああ、そうだよ。俺は萌えオタが大嫌いなんだよ、見てるだけで吐き気がしてくる」
「お前のオタ嫌いは異常だ！　俺が居ないあいだに、何がお前を変えたんだ、焔」
「てめえこそ、なぜオタをやっている。オタクがそんなに偉いか？　俺に指図できるほど」

「俺っちはただお前が心配なだけなんだ。幼い頃に命を救われたからな」
「俺の心配をする前に、自分の心配をしろよ。教会の大学に進学するんだて、でもてめえの学力じゃ、逆立ちしても無理だぜ。学年最下位のクズが」
「やってみなきゃわからないじゃないか？　俺っちの夢はやっぱりあの少女と再会すること。それを叶えるためには、大学での勉強は必須なんだよ、わかるか」
「すまん、全然理解できない。なんで名前も知らない少女のためにそこまでできる。
しかも、てめを裏切って捨てた女なんだろう。なぜ捜すんだ、復讐するためか」
「お前には一生わからないさ、彼女の気持ちなど。紙には助けてではなく、さようならと書かれていた。つまり自分から姿を消したんだ、俺っちを巻き込まないために、そう彼女は優しい子なんだよ。そんな彼女の側にいたいから俺っちは捜すんだ」
「まさか……本気で言っているのか？　恋をしたというのか？　名も知らない少女に。理解不能な感情だぜ」
「だから言っただろう、お前には一生理解できないことだと。このマッドサイエンティストめ」
「俺はいいだよ。マッドサイエンティストと呼ばれても、何かカッコいいじゃん。でもてめえは違うだろう。夢ばかり見て現実と夢の区別もつかなくなった。救いようのないバカだろう」
「ちゃんと、現実と夢の区別くらいつけられる」
「てめえが出会ったという魔法術師も、どうせ妄想の産物だろう。現実を見ていない証拠だよ」
「あの子は確かに居たんだ、俺っちはしっかり覚えている。アレは、夢でも幻でも妄想でも無い。現実のできごとなんだ」
「だったそれを証明して見せろ、口だけなら何とでも言える。俺の前にその魔法術師を連れて来い。まあ、所詮無理な話だ、諦めて自

分の愚かさを認めろ。ふっははは」
「笑うんじゃない。あの子と再会するため俺っちは大学に行くと決めたんだ」
　コイツは科学しか信じない、イヤ信じられないだ。信仰心によって生み出された神は、人の心を喰らい願いを叶える異質な存在。願いを叶えるごとに人形になっていき、最後にはイヴに隷属する。そして焔の両親は願ってしまった。死んだ我が子を生き返らせて欲しいと、その代償に心を失った。焔は未熟児だったらしく、生まれて十日ほどで死んでしまった。だからどんな代償を払っても生き返らせたいという思いがあったのかもしれない。
　神の力は平等ではない、高位の神がいれば、低位の神もいる。
　高位の神を宿した人間だったならば結果が変わっていたのかもしれない。
そんな理不尽な理由で納得ができるわけがなく、俺達は教会を憎むようになったのかもしれない。
今は寮で生活をしているが、もうすぐ出ていかなければならない。
　だからコイツは神を信じない、けれど学年一位を常にキープしているから凄い。
　トラウマの一つや二つ、誰もが持っているものだ。
　いくら技術が発達して生活が楽になろうと宗教は無くならないのだから――――
「そこまで言い張るなら俺と賭けをしないか？　俺が勝ったら、助手になってもらう。てめえは馬鹿だが、手先は器用だし機械に強いからそこそこ役に立つ」
「ああ、いいだろう。俺っちが勝ったら魔法術の研究協力と大学への手まわしを頼みたい」
「ふっ！　いいぜ。勝負内容はアキバで行なわれているという萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査だ。期限は新学期までだ」
「それって今ネットで話題の魔法バトルネタか？　アキバでアニメ

のコスプレした、美少女達が世界の命運をかけて戦っているというアレか？　確か魔法少女シリアちゃんのコスプレをした参加者もいるという。超～俺っち好みのネタじゃないか？　その真偽を確かめてくればいいんだな」

「ああ、調査方法はてめえに任せる。だが忘れるな、俺に下手な小細工は通用しないぞ。ふっははは」

コイツは何も変わっていない、児相で会った時のままだ。本当にコイツは不器用なんだよな。

俺っちが困っている時は助けてくれたし、今だって将来のことを真剣に考えてくれている。たぶん……萌え萌え美少女だらけのコスプレバトル調査というのも、俺っちを諦めさせるためのものなんだろう？　情報元不明の怪しいものだ。調査には一週間も掛からないだろう。それ目で真相を確かめ、魔法術などはないということを証明したいのだろう。ほんと愚直な奴だ

第3話

なぜ俺っちがそこまで魔法術を妄信しているかというと？　それを語るには、幼い頃の不思議な体験を話さなければならない。

あれは伯父さんに引き取られることになり、焔と別れて三年が過ぎった冬。ぜんそくを患っていた俺っちは学校にも行かず、家で過ごすことが多かった。それを見兼ねた伯父さんはこう言った。

「そんな軟弱な身体をしているから病気に負けるんだ。よし、わしが稽古をつけてやる」

無茶苦茶である、そんな家に居たら死ぬと思い逃げだした。

行く場所もなく、帰ることもできなくて、近くにあった公園のブランコに座り無駄に時間を過ごしていると、どこからともなく綺麗な歌声が聞こえてきた。とても澄んだ歌声で思わず聞きいってしまう。心震える歌声に興味を持ち、声の主を捜してみることにした。

そして伝説のイヴと見間違うほど瓜二つな少女と出会ったのだ。たぶん初恋だったのかもしれない。言語眼（げんごがん）を用（もち）いてイヴの伝説を調べることにした。

言語眼とは音声が文字なって見えるうえに、どんな言語も読めるし、語源も理解することができる。

つまり、知らない、文字、単語、文法がないということだ。

一度読んだ書籍を記録・検索・再生することができる。

書物を読むことにだけ長けた力であり、他に何の使い道もない力である。

欠点は全て日本語になってしまうことと、数式など文法で表すのが難しいものは解析できないということ。つまり、式を解く能力は持っていない。

父から受け継いだこの能力を使えるのは俺っちと義妹の虹彩（アイリス）だけだ。

利点は、力の発動が簡単でリスクがないこと。発動時に目が光ることも紋章が浮かべあがることもない。黒い目のまま発動できるた

め、他人に勘づかれることはない。
　そして驚愕の事実を知った、この世界とは別にもう一つ世界があること。次元の壁というものを超えた先に、魔法少女達が暮らす夢の世界がある。その世界ことをアルネシアと呼んでいる。
『貴方様を幾年も捜していました。桜さまから預かったこれを渡すために』
　言語眼によって写しだされた文字を読めるだけで、会話をすることはできない。見るだけの能力だからな。
　一冊の本を差し出してくる。表紙に何も書かれていない白い本だ。桜というの母の名前だったはずだ。この少女は母の知り合いなのか？　母のことはよく知らない、顔だて写真でしか見たことないし、父も死んだ母のことを全然話してくれなかった。いつも他人を信じるな、教会の神を信じるな、教会は敵だ。自分以外は敵だと思えと言っていたのに、教会の仕事を受けって死んだ。
『これは始まりの書。言語眼を持つ貴方様なら読み解く事ができるはずです』
　押しつけてくる本を軽い気持ちで受け取り、本を開くと文字が光出し直接頭の中に入ってくる。頭が痛い、割れそうだと思い閉じると頭痛も治まった。
『どうやらまだ早過ぎたようですね。もう少し時が経てばきっと読み解けるようになるはずです。だって貴方様は言語眼の持ち主なのですから』
　真っ直ぐな赤な瞳が心をざわつかせる。内に秘めた何かが彼女と共鳴しているようで身体が熱い、だが嫌な熱さじゃない。
　少女の身体的特徴を簡潔に述べると、澄みきった日の白い雲なみたいな髪で、ふわふわと柔らかそうに靡いていた。一点の曇りも無い白磁の肌が人形だしさを強めていた。その肌よりさらに白いワンピースに白いスニーカ、そして黒い日傘を差していた。ワンピースはとても質素なもので彼女には不釣り合いだと思った。雪の精霊を思わせるくらいの神々しさがあったから――――

例え、会話できなくても、仲良くなるのには、さほど時間はかからなかった。
言葉を交わさないでもわかりあえてる気がした。
なぜ、そんな気がしたのか？　傍で笑っていてくれたから、ずっと一緒に居てくれたから、いつもいつも、公園にいた。約束もしていないに毎日毎日俺が来るのを待っていてくれた、それがとても嬉しかった。彼女は俺の深いところまで入り込んで来ていた。学校にも家にも居場所のない俺は、彼女と居るときだけが、安らげた。彼女も同じ気持ちだと思っていた。でも、そんなのは俺の勘違いだった。

事件が起こったのは、彼女と出会って二週間の後のとても寒い日だった。運悪く伯父さんに捕まってしまい、しごかれてしまった。伯父さんのモーションアイは、反則的な強さがあり、まず勝ち目はない。だって動きがすべて見切られるんだよ、これだから武闘派は嫌いなんだ。まだ身体中が痛むし、今日は寒いな！　吐く息が白くなり、雪もぱらついている。手袋にマフラー、使い捨てカイロ、ダウンジャケットと防寒装備でいつも公園に向かった。彼女に会うためだ、公園に到着した時にはうすらと雪が積っていた。雪の中で見る彼女はとても幻想的で、輝いていた。この世界に舞い降りた天使のようで、息をするのも忘れて見てしまうほど彼女は美しかった。
俺っちが来たことに気付き、ゆくりと歩いてくる。左胸辺りに手をあて、呪文のようなものを唱えると少女はうつむきながら
『貴方様の父親である一心様に堕ち神の調査をお願いしたのは私なの』
「キミは教会の人間なのか？」
しかし彼女は何も答えないまま、俺っちの前から姿を消した。言葉が通じていたのかも定かではない。ただ彼女はもうここに来ない気がした。

次の日。公園に来て見たが、やはり彼女の姿は無く、一枚の紙切れだけが残されていた。
スベリ台に貼られた紙には、汚い字で「さようなら」と書いてあった。
名前も知らない少女を捜す手段も無く、たっだ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。　彼女は一体何者だったのか？　本当に教会の関係者なのだろうか、わからない多過ぎた。　ただ一つだけ分かっていることわ、彼女は魔法術師だったということだ。
彼女はぜんそくを治してくれた、彼女と別れてから一度も発作が起きていない。しかし異性と付き合えない身体になってしまったのも事実である。だからこの呪いを解くために魔法術のことを調べ始めた。そして、まだ始まりの書を読むことはできない。もし読む解くことができたならこの呪いを解く方法がわかったかもしれない。それに始まりの書は、イヴに所縁（ゆかり）のあるものだから、彼女に会う方法もわかったかもしれない。
だから俺っちは魔法術の勉強を始めたのだ。彼女の言葉を信じて、早く始まりの書が読めるようになるために

第4話

二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、そして東京は日本から隔絶された。堕ち神を閉じ込めるために萌え文化が栄え、統一教会東京大学が創立された。そして東京は七区に分け割れた。

十二月二十四日、恋人もいない俺っちは、萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査のために、今秋葉原にきています。

でも折角来たので、友達を誘ってエロゲー買ってから調査をすることになりました。

「じゃあな、つばさ」

「おお！　またな」

神中（かみなか）と白山（しらやま）と別れた俺っちの両手には、エロゲーショップで買った、大量のエロゲーが入った紙袋がある。もちろん本日発売したものだ。

二人とも、とあるオフ会で知り合った二次元信者で、とても気の合う友達です。

シャボン玉みたない薄い膜に守られた少女が突然姿を現した。

その現実離れした光景を見て、俺っちは確信した。アキバで何かが起こっているのは間違いない。興奮気味に身体を震わせ、思わずエロゲーの入った袋を落してしまう。気にせず数メートルに倒れている少女を凝視する。

「魔法少女シリアちゃんに似ているな。まるでアニメの世界から出てきたようだ」

自分を落ちつけるように、小さく小さく呟いた。

（しかしなぜ、全裸なんだ。噂ではコスプレした少女達が戦っているはずだ）

あちこち怪我をしている、服が無くなるほど激しいバトルだったのだろうか？

コイツを襲った犯人がまだ近くにいるかもしれないと思い経ち、辺りを見渡すが、人影はなく物音すらしない。薄気味悪い静けさに恐怖を感じずにはいられなかった。

気が付いた時には、人気のない公園に迷い込でいった。

確か白いワンピースに、黒い日傘を持った、小学生くらいの女子を追い掛けていたはずだ。どこか雰囲気が思い出の少女に似ていたから、思わず後を付けてしまったが、結局見失ってしまった、尾行に気付かれたのかもしれない。変質者だと思われたのだろう。探偵や刑事に向いていたいな。

――――よく考えたら、可笑しな話だ。あれからもう十年近くも経っているのに、姿が変わってなかった。まるで歳をとってないように見えた、そんなことありえないのに。

彼女を見失った場所に白い羽が何枚か落ちていた、これは天使の羽などではないのか？　そんなメルヘンチック考えながら歩いていたら、声が聞こえた。若い女性の澄んだ声だ。

辺りを見渡すが人影は無い、後ろの方から聞こえたように気がするに――――誰も居ない。

『貴方の助けを必要としている者がいます。資格を持つ者よ、始まりの書を開き呪文を唱えなさい』

エロゲーの入った袋を一旦地面に置き、リュックから始まりの書を取り出し読み始める。

『永久（とこしえ）に眠りし英知の結晶。我の呼びかけに答え、その姿を現せ』

その呪文に反応するように黄金色に輝き出す始まりの書。

どこからともなく無色透明な膜に包まれた少女が現れ、始まりの書をリュックに戻し、エロゲーを拾い追い掛けたら、人気のない公園に迷い込んだというわけだ。

見れば見るほどシリアちゃんに似ているな、一分の一等身大フィギアみたいでお持ち帰りしたい気分になるぜ。

数メートル先に倒れている、シリアちゃんに瓜二つな女性は一体何者のか、非常に気になる。溢れだす好奇心を抑えることができず、何だか少しワクワクしてきた。
非現実に足を踏み入れたと思う――――ライトノベルの主人公の気持ちが少しわかった気がした。
それと同時に危険な匂いがプンプンする、上手い話には毒ある。これは罠ではないのかという気持ちが芽生えはじめていた。裏があるはずだ、どう考えても可笑しいだろう。関わったら大変なことになるぞ。それでもいいのか、自問自答を繰り返す。
（ここで逃げたらヘタレだ。美少女を目の前して逃げるなど愚か者がすることだ）
何より胸が高鳴りを押さえることができなかった。
高校生活は、思っていたよりも普通で平凡で退屈なものだった。
家に帰ってマンガ・ラノベを読み、ゲームをやり、また学校に行く、それの繰り返しだ。
高校生になって変わったことは何一つ変わっていなかった。
バイトを始めたわけでもないし、彼女ができたわけでもない。
もうすぐ卒業するというのに中学生の頃と何にも変わってない。成長していないだ。
それはなぜか、勇気がなかったからだ。一歩踏み出す勇気が――――
だから、このフラグを逃すわけにはいかないという気持ちで一杯になった。
しかし、現状何をすればいいのかわからない。とりあえず、救急車を呼ぶべきだろか？
それとも人工呼吸……それ以前にまずは、呼吸をしているのかを確認するべきなのか？
こういう時にどうすればいいのか？　いまいちわからない。とりあえず少女に近寄り、片膝をつき、呼吸を確認する。どうやら息はしてるし、目立って大きな怪我は無い。

（わかっていたことだが、近間で見るとやはり萌えキャラだ。空を切り取ったような青い髪に、閉じた目を覆う長い睫毛。顔のパーツはどれを取っても俺っちの理想とするもので、完璧といってもいい。まるで俺っちの頭の中を覗いて、それを具現化したそんな少女だ）

まあ、そんなことはありえないんだけね、頭の中を覗くとか。

しかしこのまま放置するわけにはいかないので、呼びかけてみることにした。

「おお、大丈夫ですか？　生きてますか？　何があったんですか」

反応はなかった。困ったな、どうするかなと、思案している時

「ここはどこじゃ？　其方は誰じゃ」

少女の声が聞こえ、思わず振り向いてしまった。

ビシューーーー

不覚にも、勢いよく鼻血が出てしまい、彼女にもかかってしまった、少し申し訳ない気持ちになる。

いかんいかん、まさか三次元相手にこんな約束な展開があるとは、油断した。

相手も凄く驚いている、しかし悲鳴をあげる様子はない。固まっているのか？

（いきなり知らない人が目の前にいって、鼻血をかけられば、普通驚くよな）

俺っちの心臓もバクバクで、あたふたとしてる。もう挙動不審で完全な変質者だ。

このままではまずいと思い経ちとりあえず血を拭こうとした。

彼女の白く滑らかな体を血で汚してしまったから、そう決断し、彼女の身体を直視する。艶めかしい、それでいて素朴な感じもあり、実体がまるで掴めないミステリアスな女性で直視したまま動けなくなる。

身体にこびりついた血を、指で拭って軽く舐めった、その妖艶で萌えるしぐさにドキとした。そして妖艶な笑みを浮かべて少女は

「この血は、其方のか？　感謝するぞ」

（傷が治った！　一体何者なんだ、この少女は）
腰まで伸ばした、艶やかな光を醸し出すスカイブルーの髪で胸を隠していると言っても、貧乳だけどね。とても残念な胸で、くせ毛のない整った清純派に髪に、日焼けのない滑らかなので、生クリームのように白く柔らかそうな肌、全身から醸し出される甘い香りに魅了され、心奪われる。
大きく丸みを帯びたエメラルド・グリーンの瞳はネコみたいで可愛く、断然ネコ派の俺っちには好印象で、鼻と口は小さく、まさに萌えキャラと言った顔立ちだ。
十人中十人が萌えキャラと答えるだろう。
背は低く、百五十前後といった感じで、幼さない少女といったイメージの人形のように可愛い女の子である。
間違いなく日本人ではない、だが外人のそれとはまた違う、言葉ではうまく言い表せないが、彼女からは何か異質なモノを感じる。
本能的に関わるな、危険だと訴えている、警告して来るが、動けなかった。
彼女の目には力があり、その妖艶な体に魅了され、動くことができなくなほど美しい身体は、まさに二次元美少女以上の輝きがあった。
まあ萌えキャラだけどね。
両手で胸を触り目線を下げ、彼女は自分の体を見ると少し肌が赤くなり、さくらもちみたいになる。小さくて可愛らしい胸を直視する、視線を外すことができない。
（三次元はクソゲーで、三次元女に興味のないこの俺っちが、目を離せなかった）
「きゃぁぁあああ」
今度は叫び声をあげた、だが心地よい叫び声だった。どうやら自分が何も着ていないことに気が付いたらしい。耳まで真っ赤に染め、恥ずかしくなったのか。踵を返し、逃げるように走り出した。その背中に向けて、できるだけ紳士的に優しく叫ぶ

「ナイス――――恥じらい」
親指を立て締まりのない顔になりながら心の中で呟く。
（決してロリコンではない。思わず叫んでだけで、これはたぶんお約束なんだろう）
振り返って涙目で「ま……マント……生成」と叫び胸の前で祈るように手を合わせ、手全体が光り出してから少し開き、野球ボールぐらいの粒子の集まりが弾け、体に纏わりつきマントとニーソックスを形成した。
変身した。それはまさに魔法少女の変身シーン。このクソゲーな世界で、夢にまで見たもの。魔法少女の変身シーンが見れるとは、それだけ生きてて良かったと思える。
もう思い残すことはない。イヤ違うだろう、ここで終わっていいのか？
いいわけがない、確かに得体の知れない、危険な少女なのかもしれない。
でも、俺っちは「魔法少女が大好きなんだ」と腹の底から歓喜の声を上げ、ガッツポーズをとってしまった。
（だってリアルで魔法少女を見てしまったら叫ばずにはいられないでしょう。これもお約束だよ。このチャンスを逃すわけにはいかない。夢にまで見た非日常ライフが待っているんだから）
「某（それがし）とした事が裸身を見られたぐらい動揺してしまったが……」
逃げるのを止め、振り返り叫んだ。しかし、その顔はまだ赤く、声も少し震えているように感じた。それがとても可愛く抱きしめたくなったがこらえて、俺っちは少女と目線を合わせるために屈んだ姿勢をとる。
「リアル魔法少女とか……マジ、俺っちの予想（スペック）を超えてるぜ！　ついに俺っちの時代がきた――――」
「いいか、繰り返し申すが、血の提供痛み入る」
あまりない胸を張り、右手を腰にをあて、左手を突き出し、勢いよく叫ぶが届かない。俺っちはしゃがんだまま一方的にわめき続け

る。もはや会話など存在しない。
「オタクが夢を見る時代は終わらない、エロは世界を救う！　魔法少女最高」
「人の話を聞けっ、うつけ者」
腕を左右に振りオーバアクションで叫ぶも、聞く耳を持ったない。自分の言いたいことだけをひたすら語る、相手の話はまったく聞かないで押しつけがましく、まさに自己中と言った感じだった。
魔法少女に会えたことがあまりにもうれしくて熱くなり過ぎていた。
「よし大丈夫だ、全て任せろ――――で、その下はまだ何も着けてないのか？」
（言った後に激しく後悔した。でも、だって気になるじゃないか）
ゆでダコのように頬を赤く染め、目を見開きビックリした表情が、また萌える。もうホント可愛いな、お持ち帰りしたいくだいだよ、マジで。貧乳好きの俺っちとしてはたまらないな、ほっそりとしたスレンダーな身体わ。
「ええい、もうよい。ココはどこじゃ」
そのしぐさ、表情、全てが可愛くて、俺は思わず脱ぎ出していた。これが妖しの術か？　何て恐ろしい術だ。魔法少女を目の前にして興奮を抑えることができなかっのかもしれない。
「この変態！　人の話を聞け、うつけ者。なんて破廉恥な男だ、信じられない。それとも上手く言語が翻訳されていないのか？　それにしてもドスケベな顔をしているな。気持ち悪い」
目線を下ろして不敵な笑みを作り、蔑むように、憐れむように見つめてくる。とりあえず服を着るか、寒いからな。自制心は大切だよな、やり過ぎるとひかれるからな。少し自重してちゃんと相手の話を聞くか、それがいいな。これ以上怒らすのは得策じゃない。
「うん、大丈夫。ちゃんと聞こえてるよ、でキミは何者？」
「よくぞ、聞いてくれた、某は兵器だ」
「……」

「――――兵器」
「うむ、そうじゃ」
どこをどう見ても、萌えキャラである。しかも俺好みの萌えキャラだ。
「こ……っこらっ！　いやらしい眼でジロジロ見るな。ハレンチ小僧め」
耳まで赤く染めて、何とも頼りない紺色マントをしっかり掴み胸を隠し、足を固く閉じているが――黒いニーソックスが眩しい。今の姿からは異質な物は感じない。気の所為だっただろうか？　まあ、可愛いからどうでもいいや。
「最初は堂々と見せていたじゃないの～。なんでダメだよ、ケチケチするなよ」
「それは確かにそうだが、なんか其方に見られるのはイヤなんだよ。穢されている気がするから――――」
何かを思い出したようにいきなり辺りを見回す。
「教会からの追っ手が！　近くにいるはずだ」
手にマントが引っかかり下半身が露になるが、本人は気がついていないみたいだ。危機迫る感じで公園を見回しているが、人の気配は全く感じない。これだけ叫んでいるのに誰も来ない可笑しいのかもしれないが――――美少女が突然現れる何ていう、『王道展開』にあったせいで、驚く気にはなれないしかしというか、やはりというか、下は何も入っていないんだ。つまりノーパンだな――などという、いやらしいことを考える余裕はあった。
「どうやら近くに敵はいないみたいだな。其方に一つ教えておきたいことがある。この身体のことじゃ」
「改まってどうした」
「おとなしく聞け、うつけ者」
「ああ、わかった。そうかっかするな」

――――それは戦国時代。

あまたの宗教が入り混じる日本で、唯一絶対神を追い求めた男がいた。その男の名を花守天心といって、天下統一のためには唯一絶対神が必要だと考え。神を顕現する方法を摸索している途中で異界の存在を知ってしまった憐れな男じゃあ。

異世界アルネシアに魅了された憐れな男は、一族の力を借り、始まりの少女イヴが眠るという遺跡で始まり書を見つける、それが非劇の始まりであった。始まりの書を手にした男は、異世界の門を開いて異世界人を招き入れてしまった。何かに取りつかれたように人格が豹変してアルネシア人ともに忽然(こつぜん)と姿を消した。

それから神隠しが起こるようになり、多くの若い女性が行方不明になった。行方不明になったの女性は、アルネシア神復活の供物として捧げられるために、選び抜かれた者達じゃあ。心に深い闇を抱え、神に助けを乞った者達の中に某も居た。

神の石と呼ばれる、アルネシア神の力を宿す宝石を身体に埋め込まれ、神の器としての教育名の調教を施された。

神の石は、寄生する個体によって形を変え、宿す力も違う。中には心を喰われ人形になったものいた。

そして百体以上のアルネシアドールが生み出され、天心の追い求めた唯一絶対神の器になれるのはただ一人だけ、それ以外は廃棄処分が決まっていた。

生き残るために多くの仲間を手にかけしまった。残り半分になった時に反乱が起こった、その混乱に生じて施設から逃げることに成功した某はあてもなくさまよっていた。

しかし生まれた時代が良かった某の力を必要とするものはたくさんいった。兵器としての力、他者を殺す力、それを存分に使い殺し続けた。戦(いくさ)が終わった頃には独りになっていた。恐れられ忌み嫌われていた某を救ってくれたのが、マスターじゃ。

マスターが兵器である某に居場所をくれたから、今こうして生(せい)を真っ当することができておる。マスターには感謝している

そこで話しが終わったのを確認してしゃべり出す。
「なるほど難しいことはわからないけど、魔法少女ということでいいだね」
「一体何を聞いておたんじゃ、其方は――――某は兵器じゃ。断じて魔法少女などではない。たわけたことを申すな」
誇らしげに顔を近づくる。よほど兵器であることが嬉しいのだろう。俺っちには理解できない感情だ。魔法少女のほうが断然素晴らしいのに、そのことに気付いていない彼女が不憫に思えた。
「まあ、行き成りこんな話を聞かされたら驚くのも無理はない。かかかかか、どうじゃ、某の凄さがわかったか」
どや顔で言ってくる少女の顔を見ながらとりあえず頷き、さっきから気になっていたことを尋ねてみる。
「話にでてきた、始まりの書ってこれのことか」
「おっ！　それじゃ、間違いないのう。なぜ、其方がそれを持っているじゃ」
「やっぱり、この本のことか？　この本の持ち主を捜しているだよ。何か知っているか」
「すまんのう、長き眠りについていたのでわからないのじゃ。でもマスターなら知っているかもしれないけど……今どこにいるのか、わからないのじゃ。はぐれてしまったじゃ」
「一体何があったんだ。なぜシャボン玉みたない薄い膜に包まれて、全裸で現れた」
「統一戦争で核に傷を覆った某は、回復のため長き眠りについた。その隙を教会の奴等に攻撃され遅れとった某を逃がすためにマスターは単身で乗り込み、シリウスの転移術でここに飛ばされたわけじゃ」
「治療カプセルに入っていたから全裸だったわけだ。しかしなぜ俺の前に現れたんだ」
「それはたぶん其方が始まりの書を持っているからだろう。転移術は大きな魔力に引き寄せられるものじゃからな」

「一様筋は通っているな。お前が何者なのかはいまいちわからんが――――」
「其方こそ、何者だ。普通の人間が始まりの書を持っているわけがない。それは神の力を宿した魔導書じゃ。資格を持つ者しか触れることができないはずじゃ」
「生憎、俺っちは普通の高校生だ。特別な力も持ってないし、この本だって偶然手にいてただけだ。お前が思っているような、特別な人間ではない。残念だったな」
どうにも納得のいかなそうな顔をしているが、嘘はついていない。言語眼を持っているが、始まりの書は使いこなせてないしな。それにしてもマント一枚というのは、いろいろとまずいよな。精神的に――――よし決めた。
「ちょっと、ついてこい。貴様の服を買ってやる。その格好ではいろいろまずいだろう」
「施しは受けんぜよ。服ぐらい自分で生成できるじゃけん、某をあまり愚弄するな、うつけ者」
「そういうなよ、貴様の力は有限なんだろう、血がなれば何も生成することができない。そうだろう」
「なぜ、それを知っている。まさか教会の人間か？　某を追ってきたのか」
（やっぱり、そうか？　だから俺っちの血を浴びて傷が治ったのか？　人間の血をエネルギー原としているわけか？）
「俺っちは教会の人間じゃない、お前の言動を聞いていればそれくらいわかる。いざって時に力が使えなかったら困るだろう」
「其方が教会の関係者じゃないなら、某に血を吸わせろ。そしてたら其方を信じてやらんこともない。もちろん買い物にも付き合ってやるぞ。なかなかの好条件だと思わないか？」
「思わないね、だって痛いのはヤダもん。それに面倒事にも関わりたくないしね。血を吸われるぐらいなら逃げるね、全力で……」
「某を置いて逃げるというのか？　こんな軟弱者が教会の人間のわ

けないか？　恥を知れ、うつけ者」
「何とでも言えばいいさ、争いごとは嫌いなんだよ。だから、お前がどうなろうと構わない。俺っちは見ず知らずの人間のために命を掛けられるほど、おしとよしじゃないんだよ。成さなければならないことがあるからな」
（なんで、俺っちこんなこと話してだろう、まるでバカみたいだ。関わりたくないならとっと逃げればいいのに……）
「其方にも成さねばならないことがあるのか？　わかったぜよ、其方について行こう」
「おお！　わかってくれたか、さっそく服を買いにいくぞ。ついて来い」
「某に命令するな」
「いろいろとめんどくさいヤツだな」
「面倒言うな」
　地面に落としたエロゲーを拾い、俺達はコスプレショップを目指して歩くことにした。できるだけ人のいない道を選んで向かった。さすがに人通りの多いところを堂々と歩く勇気はなかった。

第5話

なんとか、コスプレショップに来た俺達は驚愕していた。
「俺っちも来るのは初めてだが、ココは凄いな！　いろな種類のコスプレがある、バニーや、ナースや、メイド、あとアニメの衣装もたくさんあるな」
「ああ、凄いとしか言えないな。こんな摩訶不思議な服を見たのは初めてじゃ」
「好きなのを選べ、金の心配はしなくていいからな」
「本当にいいのか？　お前へ意外といい奴じゃないか？　ただのうつけ者ではなうな」
「今頃気付いたのかよ、まあいい。早く選べよ。日が暮れちゃうから」
「ああ、そうしよう」

「よし、これに決めたぞ。では試着して来る、覗くなよ。覗いたら殺すからな、絶対殺すからな、ハレンチなことは考えるなよ」
「わかったから、早く行け」
何度か振り返りながら、慎重に試着室に歩いて行く。俺っちはとりあえず試着室の側で待たせてもらうことにした。衣擦れの音が想像を駆り立てる、覗く気はないが、女の子の着替えを見たいという気持ちはある。それが可愛い子なら、なおさら見たいと思うものだ。男はそういう生き物だ。
しばらく葛藤が続いた。命は惜しいが、でも覗きたいという気持ちも捨てきれない。俺っちはどうすればいいだと、頭を抱えていると……カーテンが開いた。どうやら着替えが終わったようだ。
「どうかな？　似合うか？　某、こういう服着るの初めてじゃから、よくわかんなくて、感想聞かせてくれるか」
とてもしおらしく言う彼女は可愛らしく、ハロウィンの衣装も非

常に似合っていた。まさに彼女のためにしつらえった、ピンクドレス、その上に羽織る紺のマント。頭上に輝く紺色のとんがり帽子は魔女といった出で立ちを強くしていた。
魔法少女らしさの欠片もないコスチュームだ。まるで俺の好みをわかっていない。ほんとうにコイツは魔法少女としての自覚があるのか……はなはだ疑問である。
「何だ！　その格好は！　確かに好きなのを選んでいいといったが、それはないだろう？　魔法少女らしさがまったくない。却下だ、着替えなおせといいたいところだが……それはそれで、なかなか似合ってるし、時間もないから今日のところは許してやる、ありがたく思え。ふはははは」
「いちいち、何で偉そうなんじゃ！　素直に誉められないのか？　このうつけ者め」
苦笑を浮かべているが、どこか声は弾んでいた。会計を済ませて俺達は次の目的に向かうことにした。
もちろん下着も購入した、さすがにノーパンのままではまずいからな。あとパンプスも買ってあげった、服に似合うやつね。いつまでも靴下一枚で歩かせるわけいかないでしょう。ふびんな子だと思われちゃうよ、ホント捕まらなくて良かった。
「なあ、どこに向かっているんだ」
「其方は黙ってついてくればいいじゃ」
紺色のマントとスカイブルーの長い髪を靡かせながら、人気のない路地裏を進む少女、その斜め後ろからついていく俺っち。かれこれずいぶん歩いている、ほっとけないオーラーを出していたので、仕方なく一緒に行動している。あくまでも、仕方なくだ。俺っちは決して優しい人間じゃないからな、見ず知らずの他人のために行動できるほど立派な人間じゃない。ただコイツが本当に兵器なのか、気になっているだけだからな。
「ところで本当に兵器なのか？」
「その眼は、某の言う事を信じてないという眼だな」

「イヤ、別に信じてないわけじゃないだ、ただ現状それを確かめる術がないしな。でも決して疑っているわけではない。信じてくれ」
「まあ、ここら辺でいいか？　人気もないこの廃墟ならゆっくり話すこともできるか？」
　そう言いながら辺りを見渡す、ここは確か法律改正の影響で捨てられた場所……昔は最先端技術を扱っていたみたいだけど、今は立ち入り禁止区になっている。
「魔法少女になる決意ができたのか？　異世界の話を俺に聞かせてくれるんだな。どんな悪と戦っているんだ、なんだかわくわくしてきたな」
「最初に言っておく、某は魔法少女になるつもりもないし、異世界から来たわけでもない。其方の考えているような不思議な力はない。しかし倒さなければならない敵ならいる。頼む、某のパートナーになってくれ、其方はなかなか見所のある男だ！　もちろんお礼はする。どうしてもアルネシア杯で優勝しなければならないじゃ」
「でも俺っち、普通の人間だし、戦う力なって持ってないよ」
（確かに非現実の世界に憧れてたけど……それはエロゲーの世界で、バトルモノじゃないんだよな。武闘派の家に育ったからかな？　こういう運命的な出会いでもバトルモノ展開なのか。争いごとは嫌いなにいつもこうだ）
「それは大丈夫じゃ、某は其方に力を与えることができる。ここで会ったのも何かの縁だ。力をしてくれ」
（何でこんな展開になっただろう、俺はただ平和な世界で魔法少女とイチャイチャできればそれでいいのに、武術の世界からは逃げられないのか？　これでは少女を助けた意味がないじゃないか？）
「某には共に戦う、パートナーが必要なんだ。頼む」
「そんなことといきなり言われても困るよ」
「血の契約を交わそうではないか」
「契約？」
「そうじゃ、契約じゃ。某と契約しアルネシア杯で優勝すれば、其

方の望みも一つだけ叶えることができるぞ」
「興味深い話ではある。だが断る、俺っちは他人の力は借りない主義だ」
「どうしても叶えたい願いはないのか？」
「ある、だがそれは自分の力で叶えなければ意味がないんだ。だから他者の力は借りない」
（まあ、ハーレム王国はちょっと創ってみたいけどな）
「そうか、やっぱりそうなのか。この世界に某の味方など独りもいないのか？　孤独だな、帰る場所すらないとは」
陰のある表情を見て俺っちは唇を噛みしめ、こみ上げてくる感情をぐっとこらえる。
彼女の虚ろな瞳を見ているといたたまれない気持ちになった、こらえきれない涙が溢れてくる、何とか励ましてあげたかった。彼女にはずっと笑顔でいて欲しかった。
「つまりお前は魔法少女で俺っちの家を仮住まいしたいと」
満面の笑顔浮かべ、歯を光らせ、ガッツポーズを取り
「という事だな！　パートナーになるのは無理だが、友達にならなってもいいぞ」
それが精一杯だった、もっと気のきいたことが言えればいいんだけど、うまく口にできなかった。頬掻きながら相手の言葉を待った。
「友達か？　変わったことを言う奴だな其方は、某は兵器だぞ」
顔を真っ赤に染めて「それも悪くないか！」と微笑む。
見てるこっちまで恥ずかしくなり、顎に手を当てながら
「と、なると俺っちはマスコットか？　つまり兵器もとよい、魔法少女にエロい事しほうだいというわけか？」
子供だな。バカだからこんな時どうしたらいいのか、わからないから、ついふざけてしまう。真剣に人と向き合うことはできない。本当に弱く情けない人間なんだよ、つくづく嫌になるぜ。いつだって俺っちは独りよがりだ。相手の気持ちなんて考えていない。
人とちゃんと向きあうことのできない、不完全な人間なんだよ。

だからかな、彼女をほっとくことができなかった。
「おい、其方はどこまでふざけているつもりだんじゃ。それなら某がどんなに恐ろしい兵器を見せてやる」
「何をする気だ」
全身の筋肉を張りつめて身構える。　彼女から目が離せない一体どんなものを生成するつもりだ。ゴクンと息を呑む。けれど何もおこらなかった。
可哀想な目で彼女を見る。ここまで緊張感を出しといて、それはないだろうと思ったからだ。この空気に絶えかねたのか、身振り手振りで説明を始める。その姿は滑稽でしかなかったため、思わず笑ってしまう。そんな姿を見て必死に叫ぶ少女。
「ち……ちがうじゃ！　これは何かの間違いじゃ。某は本当に恐ろしい兵器なのじゃ」
「わ・わかった、わかったから、泣きそうになるな」
「これはエネルギーが足りなくて武器を生成できないだけで……」
「燃費の悪い奴だな、やっぱり服を買っといて正解だったわ」
「また某を愚弄するつもりか。うつけ者の分際で、なら許さんぞ。其方から血を根こそぎ奪ってやる」
「ほお～やる気か。俺っちは強いぞ、小さい頃から鍛えられてたらな」
手をポキポキと鳴らしながら、にやりと薄笑いを浮かべる。
「やれやれ、どうやら少しお仕置きが必要なようだな、ここなら人目もないし丁度いい」
「ずいぶんと自信満満じゃな、逃げるじゃなかったのか？　このうつけ者め」
「あの不思議な力が使えないということがわかったからな、今の貴様など恐れるに足らん」
「あまり某を舐めるな」
爪を立てて、スカイブルーの長い髪を靡かせ、エメラルド・グリーン瞳を光らせて猫みたいに飛んでくる。

（先手必勝ということか？　やられる前にやる。良い根性だ）
「とにかく血をよこせ、うつけ者め」
「こら、抱きつくな」
（あれ何ともない？　この子は本当に人間じゃないのか）
　異性に抱きつかれると、全身から猛毒を出し、相手を殺すという呪いがかかっている。これは健康な身体を入れた、対価みたいなもので、名も知らない少女からもらった力だ。まあこれが原因で、普段は女には興味ない振りをしているだけなんだけね。しがみついてきた少女を引きはがし、暴れる少女をなだめるように優しく語りかける。
「やれやれ、いくら昨今では美少女バトルが多いとは言え、安易に主人公に襲いかかるのは感心せんな。それでも魔法少女か？　愛と正義のために戦え、そしたら俺っちも力を貸してやる。血はあげないけどな」
「いいか、某は魔法少女なんかじゃない兵器じゃ！　だから愛と正義のためには戦わない、自分の信念のために力を振るう。わかったか、うつけ者」
（魔法少女じゃ無い、どうやらホントみたいだ……呪いが効かなかったしな。人間じゃない何て……あんまりだ）
　その場に倒れこみ、涙を流しながらコンクリートを叩く。冷たくて堅い、でも俺っちには心地よいくらいだ。
「そんなに落ち込まなくても……。だから最初から言っているじゃろうが！　この身は兵器、戦に勝つ為の武器だと。これだからうつけ者はダメじゃな」
「ぐすん、そりゃそうかもしんだけどさ。まあ、そんな都合良く魔法少女が現れたりしないよな」
「自分で言うのもなんじゃが、兵器が見の前に現れた事にはやっぱり驚かないじゃな」
「ああ、驚かない。だってお前は魔法少女だろう。その根拠は魔法少女シリアに似ていることだ。なぜ似ているのか、答えてくれ。そ

れがずっと気になっていたんだよ」
「其方の言っていることはさっぱりわからない。魔法少女シリアとはなんじゃ。アルネシア人のことか？　異世界アルネシアには多くの魔法少女が住んでいるからな。しかし某はアルネシア人ではなく兵器だ。このうつめ者め、何度言えばわかるのじゃ」
「そうか、わからないか。では貴様に用はない。イヤ、まてよ？　コイツが神秘的な力を持っているわけだし」
（変身もできるし、コイツといればそのマスターというのにも会えるかもしれない。独りで闇雲に捜すよりも効率がいい）
「おい……ちょっと、どうしたんじゃ。急に黙りやがって、何を企らんでいる、うつけ者」
「てっ事は……俺っちがお前を立派な魔法少女なるように教育すればいいのか。それれ全て解決か。よし決めた。俺っちがお前の面倒をみてやる。行くところないんだろう」
「ちょっと待って……勝手に話が進んでいるぞ。某はまだ魔法少女になると言っておらんぞ。一体何を聞いたいのじゃ、うつけ者め」
「やっと見つけたわ……永遠とも思える時間を生きて――――」
機械的なとても冷たい声が聞こえた、いつの間に現れたのだろうか。目の前には、豊満な胸元を編み上げた黒いミニドレスに、黒のロングブーツ履いた、セクシーな女性が立っている。　俺っちと背丈の変らない、でもどこか大人びた雰囲気がある魅力的な美女は、深淵の瞳で兵器少女を静かに見つめている。切れ長い睫毛は優美さを強く表し、フレッシュ・ピンク頬は本当に美しく、ローズ・ピンクの唇はぷるぷるとしていた。肩の上で切り揃えられた髪したの表情は、驚くほど冷淡で人形みたいだった。さらにドレスもブーツもひじまで覆う手袋も全部、『ソフトエナメル』で統一されており、どこか現実離れしていた。魔法少女というよりは、魔女の出で立ちに近く。思わず興奮して下半身に力が入ってしまうほど妖艶で、手に握るはムチではなく、漆黒剣だ。剣先は赤く両刃で、艶めかしく光りを放ち、切れ味の恐ろしさを物語っている。左手で剣を軽く持

ち上げた途端、黒刃に細かな赤の装飾文様が浮かび上がると同時に、長い前髪の下の黒い瞳が、かすかに光を放つ。
「人間っ！　虚飾虚栄者（きょしょくきょえいしゃ）を渡せ」
冷淡な声が発せられ、体のラインにピッタリとフィットした。エッチな服でせめよってくる。理性が揺らぎはじめる。卑猥な妄想が溢れてくる。
（ヤベー、マジーヤベー。ふ、踏まれていた、罵られたい）
「カサンドラ、相変わらずきわどい格好しているわね。さすが色欲の魔女ね」
（なんて、欲情を掻き立てられる姿なんだ、ヤバイ、ほんとうにヤバイ）
「ひさしぶりにその言葉を聞いたわ。最後にあったのは一世紀くらい前だったかしらね。ホント懐かしいわ、まさか虚飾虚栄者と呼ばれたあなたが、人間とつるんでいるとは思わなかったでけね」
したたかな笑みを浮かべ、さらに距離を詰めてくる。艶めかしい手付き、ローズ・ピンクの唇が軽く触れ、耳元で甘く囁かれては、頭が真白になり
（踏まれていた踏まれていた踏まれていた踏まれていた踏まれていた踏まれていた）
もはやそれ以外のことは考えられなくなっていた。
「もうそんなに経つのかしら、時が経つは早いものね。一体何人の男を籠絡させたのかしら。ホントいやらしい女だわ」
そして気がついた時にはソフトエナメルストッキングの太股に吸い寄せられていた、頬を擦りつけていた。猫のように四つん這いになっていた。
「この変態、痴れ者、うつけ者――――――とっと死にやがれ、てっ！　間違えた目を覚めせ」
蹴られた、思い切り蹴られた拍子に、白のパンティと綺麗な太腿が見えた。さすが魔法少女なってキレのあるツッコミだ。いささか予定とは違うが――これはこれでありだな。パンチラも見れたし、

目が覚めた。やっぱり俺っちは魔法少女一筋だぜ。
「ありがとう、おかげで目が覚めたぜ。やっぱりお前は魔法少女としての素質があるぜ」
「イッタイ、何度言わせるつもりじゃ。某は魔法少女はならんといっているだろう。このうつけ者め。いいかげん、あきらめろ」
「人間っ！　その女には気をつけなさい。決して心を許しは駄目よ、裏切られるからね。ウフフフ――――」
不敵な笑みを浮かべ地面を強く蹴り、一気に距離を詰めてくるカラサンドラ。　俺っちが身をひるがえすより早く首目がけて斬りかかる。
食らう寸前しゃがんで避けたが、すぐさま第二撃目を後方に転がって避けるが、頬をかすっていたみたいだ。血がパタパタ垂れた。
「いきなり何をしやがる。危ないだろう」
「ウフフフフ。さすがは虚飾虚栄者が認めた人間ね。武道の心得があるみたいね。でも残念――ただの人間じゃ、私を殺すことはできわしないわ、クスクス」
「ここは一旦逃げるぞ。ヤバイ、ヤバ過ぎる、イカレテやがる」
「一体ドコに逃げるというの？　この時の止まった世界で。私の能力で時を止めているのよ、だからどんなに叫んでも助けも来ないわ」
「おい、奴の言っていることは本当か」
「ええ、本当よ。某の能力は創造で、カサンドの能力は時の凍結なの」
「でもそれ可笑しくないか？　奴が本当に時を止められるなら俺っちの時間も止めれば、それで済むだろう」
「そうね、たぶん彼女もまだパートナーを見つけてないからだと思う」
「確かに私はまだパートナーを見つけてないわ、でもそれだけじゃなの？　そこの人間から、強大な魔力を感じるわ。初めは虚飾虚栄者と契約したのかと思ったけど違うみたい出し、でも普通の人間に

これほどの魔力はないはずだわ、一体何者ですか」
「普通の人間だよ。両親も普通だしね」
（嘘である。両親のことはよく知らない。でも本当のことを答える義理もない）
「まあ、そんなことどうでもいいわ、どうせすぐに死ぬのですから、ウフフフ――――」
「カサンドラは本気で其方を殺すつもりよ、早く逃げて」
「逃げろって言われてもな。折角手に入れた、魔法少女をミスミス手放すわけにはいかないよな。やっぱ俺っちも戦うよ」
（こんな危機的状況でも、彼女を見捨てて逃げるという選択肢はなかった。もちろん危機感はあったが引くに引けない状況だった。俺っちは臆病な人間だから、誰かを見捨てて逃げるなんて、勇気ものもないんだよ）
「其方は本当に馬鹿じゃな。まあ、そういう馬鹿は嫌いじゃないけどね」
「どうやら死ぬ覚悟はできたみたいですわね。ウフフフ――――せめてもの情けですわ。苦しまないように、一瞬で終わらせてあがげますわ」
アレは一撃必殺の居合いの構え。迂闊（うかつ）に近づくのは危険だな。ここは遠距離からの攻撃にきりかえるか
「おい、飛び道具か、何か持ってないか」
「すまん、持っておらん」
「そうか、ならしょうがないか？」
遠距離攻撃は無理だ。拳一つで何とかするしかない。覚悟を決め、地面を強く蹴り、カサンドラ目掛けて殴りかかる。
「ぐっは」
致命傷は避けたが、やはり斬られた。血がドバドバでてくる。何て切れ味のいい剣だ、かなりの業物とみた。右脇腹がキリキリ痛む。
「おい、かなり血が出てるぞ大丈夫か」
叫びながら蒼いと紺のマントを靡かせながら少女が掛けっ寄って

来る。
「これくらい大したことない」
「そんな傷まで覆って、よく笑ってられるわね」
「魔法少女の前では笑顔でいるって決めているんだよ。その方がお前も安心するだろう。それに魔法少女は宝だからな、必ず守ってやるよ」
（でも、痛いのは嫌いらし、血を見るのだて好きじゃない。できれば争いことならはしたくない。でも幼い頃の自分との誓いは守らないとな）
「だから、某は魔法少女じゃないと言ってるだろうが、うつけ者。本当の本当に何度言えばわかるんだ。このうつけ者が」
「安心しろ、ちゃんと立派な魔法少女に教育してやるからな。大丈夫、大した傷じゃないさ」
「いまから応急処置から、あまり動かないで」
泣きそうな顔で必死に包帯を巻いてくれている少女を見て、ああ、ありがたいと思いながら、話し始める。
「魔法少女ってさ、愛と正義のために何の見返りも無く、その身を犠牲にして戦っているんだよ。それって誰でも真似できることじゃないよね。自分のために戦うじゃなくて、大切な誰かを護るために戦う。それが魔法少女なんだよ。でも兵器はどうだい、人を殺すために道具、それでは誰も護れないじゃないか？　キミを孤独にするだけじゃないのか。それじゃあ、あまりにも悲し過ぎるじゃないか。救いを求めるなら魔法少女になって、俺っちと戦わないか？　キミなら立派な魔法少女になれると思うだ」
話し終えた頃には応急処置は終わっていた。自称兵器は俺の血を使い、壁を作り、敵の攻撃を防いでくれただけでなく、傷の手当までしてくれた。何ていい奴なんだ、見ず知らずの俺っちを助けてくれる何て。クソ、泣けるぜ。
「其方という男は、魔法少女のことしか頭にないのか？　つくづく理解不能な男じゃな」

「命を懸けるには十分過ぎる理由だ。俺っちは世界の誰よりも魔法少女を愛しているからな」
「相当の変わり者だな。だが残念なことには某は兵器じゃ。人殺しの道具じゃ、いまさら生き方は変えられないし、魔法少女になるつもりなどこれぽっちもないさ。だから其方はここに隠れていろ。某が捕まれば済むことじゃからな、迷惑をわけた。すまん」
「ふざけるな！　何勝手に諦めてんだよ。成さなければならないことがあるのだろう。なら最後まで諦めるな。希望を捨てずに戦え、そして自分の意志を貫け」
「其方に言われるまでもない。某は某のためにしか力を使わないと決めておる。じゃから。其方の力など借りずとも大丈夫じゃ。日本最強の兵器じゃからな」
壁に亀裂が走る、もう悠長に話している時間はないのかもしれない。
「最後、これでは言わせてくれ、死ぬな」
「当たり前じゃ。もしもの時はコレを使え」
決意の言葉と同時ぐらいに風船のような物を俺に渡してきた。
「コレは何だい」
「一度だけ其方の命を守ってくれる。使い方はふくらますだけじゃ。うまく使うのじゃぞ」
クソ！　一人で行きやがった、かっこつけやがって、やっぱり正義の為に戦ってんじゃないか？　それでこそ魔法少女だ、俺っちもこんなところでじっとなんてしてられない。何か作戦を考えないと殺されてしまう。
壁が砕ける音ともに少女の悲鳴が聞こえた、紺色のとんがり帽子が飛んできた。これは兵器少女が被っていたやつだ。それを見て、俺っちは駆け出していた。
無我夢中で足を動かし、少女の安否を確かめるに、辺りをくまなく探すと、瓦礫に埋もれている彼女を発見した。
スカイブルー美しい髪は、埃で色あせくすんだ色になっていた。

折角買ってあげたハロウィンは衣装も、所々破れており、肌も煤けており、血が滲んでいる。唇を噛みしめて痛み耐えている姿はとても、痛々しくて見てられなかった。
「今、どかしてやるから待っていろ」
異様な緊張感からか、全身から汗を噴き出し、埃を吸い込んだせいか、喉が痛かったが、我慢しなんとか叫ぶ。腰から足に、肩に力を入れ、やっとの思いで瓦礫をどかし。彼女を助けだすことに成功したが、手はボロボロで、少女の血で真っ赤に染まっていた。
「お……お、おい！　だ……だいじょうか？　血まみれ……だぞ」
「なぜ……出てきた。死に……たい……のか？　うつけものが」
「そんな、傷だけらけ身体で他人の心配をするとは、やっぱり魔法少女の素質があるな」
「ふっ！　またそれか？　ああ～～～某と其方は似ているのかもしれない。強がりで、意地っ張り、そのくせ、本当は弱い」
「ああ、そうかもしれない。だからほっとけないのかもしれない」
「仲良く話しているところ悪いんだけど、これで終わりにしてあげるわ。光を奪え、エクリプス」
少女のことで頭が一杯になり、敵が近づいてきていることにまったく気付かなかった。辺りが真っ暗になる、世界から光が消えたみたいだ。何も見えない。闇に紛れて無数の斬撃を繰り出してくる。アイツの悲鳴も聞こえた。
（バカな、この暗闇の中で俺達の姿が見えているというのか）
音無なく迫ってくる刃、避けることは不可能に近い。完全に闇に溶け込んでいる、実戦経験をかなり積んだ、プロの暗殺者だ！
しかも斬られるたびに強い脱力感ある、まるで力を吸われているみたいだ、長期戦は不利だ。となると、とれる行動は一つしかない。アイツの力に賭けるしかないか。
「臆病者め、姿を隠してネチネチ相手を痛ぶることしかできないのか？　この弱虫」
「弱虫ですって、許せませんわ。この最強の一撃をもって葬ってあ

げるわ」
「俺っちの急所はここだ！　ちゃんと狙えよ」
「その減らず口も聞き飽きましたわ」
　鈍い音が響き、光が世界に戻ってきた。やったな、特に作戦プランとかはなかったが、俺達は似たもの同士だ。奴等ならきっとやってくれると信じていたさ。これで俺達にも勝機が生まれた。
「一体何が起こったというのですか。なぜ光が戻ったのですか」
「地面を見てみろ」
「地面が光っていますわ。これはヒカリゴケですわね」
「それは普通のヒカリゴケとは、比較にならない明るさを放つ。どうやら半径三メートルまでしか暗闇にできないようだな」
（鈍い音の正体はゴムだった。ゴム風船で作った人形を身代わりにすることで一命を取り留めた。そのあとは賭けだったが、成功して良かった）
「小賢しいことをしてくれますわね。でももう虫の息のみたいですわね。大人しく久遠の魔導具を渡せば、命だけは助けてあげますわよ」
「てめえはバカなのか、俺っちが魔法少女を手放すわけねえだろう。それにな俺っちはこんなところじゃ死なない。死ぬわけには行かないだよ」
　とりあえずアイツと合流しよう、そして二人でコイツを倒そう。一人で出来なくても二人なら倒せるはずだ。どうやらアイツも同じことを考えていたみたいだ！　何か叫びながらこっちに近づいてくる、声がだんだん大きくなる。俺っちも走り出す、彼女に向かって全力で駆け出す。しかしその道をふさぐカサンドラ。
「そこをどけ、邪魔だ！　俺達の道をふさぐな」
「なら、打ち破ってみてくださいな。お前たちの底力を私に見せてください、そして私をもっと楽しませてくださいな」
「某はここで壊されるわけにはいかない、これが最後のチャンスじゃ。某と協力してカサンドラを倒すのじゃ」

「それしかないか？　俺っちもまだ死にたくない、あの少女に会ってないからな。いいぜ、協力してやる」
　カランドラをはさみうちし、俺っちはありったけの力を込めた掌底を腹めがけてくりだす。同時攻撃だ、これはさすがに避けられないと思ったのもつかの間、身体を掴まれ、一回転し地面に叩きつけられ、その後俺っちの右腕を掴んで兵器少女のほうに投げられる。なんて俊敏で力強い動きだ、まったく見えなかったぞ。
「おい、変な所触るな、どけ！　くっつくな、変態、うつけ者」
　覆いかぶさるように倒れた、俺っちは兵器少女に罵倒された。すぐにどこうとしたが、変な倒れ方をしたしせいか？　絡まって身動きとれないという不可解な状態に陥った。甘い香りが鼻腔をくすぐり、とても幸せな気分になる。彼女の吐息やら体温を肌で感じることができるぐらい、かなり密着した体勢である。この死んでもいいなと思えるほど心地良かった。ただ残念なくらいに胸はない幼女体質なのである。まあそれはそれで――――ね。
「コラ、息をかけるな、気持ち悪い。お前、今の状況わかってないだろう、だからそんなにふざけてられるんだよ。コラ、動くな。変なところに当たるから、この変態、獣、うつけ者」
「仲良くじゃれあっているところ悪いんですが、そろそろトドメを刺さしてあげるわ、二人一緒に仲良く死んじゃいなさい」
「時間がない、早く某の血を飲のじゃ、死にたいと申すか」
「ああ、わかったぜ」
　くすんだ長い髪を払い、白く綺麗な首筋に噛み付く、血はとても苦く、錆臭いくてお世辞にも美味しいとは言えない。
だが、死にたくなかった、だから無我夢中で血を吸った、血に飢えた、吸血鬼のように激しく吸った。
身体中が光出す、あまりの眩しさにカサンドラも近づけないようだ！　よし、ほどけた、身体を自由に動かさせるぞ、それに細胞の一つ一つが活性化しているのがわかる。傷がみるみる治っていく、全身から力が湧いてくる。これが血の力か？　過ごすぎる、一体どう

なっているんだ。
「契約は成功したみたいね、力が溢れてくるがわかるわ。まるで生まれ変わったみたいじゃ」
「これが血の契約か？　今なら何でもできる。不可能なことも可能にできるはずだ」
（こんなことならもっと早く契約しとけば、そしたらこんな痛いめにあわないで済んだのかもしれない。でもピンチからの大逆転の方がカッコイイか）
「そうでなければ……面白くないですわ、さあ、お前たちの全てを私にみせてください。全力でお相手してあげますわ、楽しいパーティの始まりですわ」
「貴様の戯言にいつまでも付き合うつもりはない。エロゲーを剣に変える力で一気にかたづけてやる」
（えっと、今日買ったエロゲーはどこだろう――――あ・あった）
運よく近くに一つ落ちていた、エロゲーまでの距離約十センチ。
素早く地面を蹴り取りにいこうとするが、邪魔が入る。
（クソ、後もう少しなのに？　手がエロゲーに届かない）
「自分の能力を喋るとは、救いようのないバカですわね」
「それは貴様のほうだ、カサンドラ」
「どういうことですか？」
「天叢雲剣生成（アマノムラクモノツルギ）」と叫び、手が光り出して少し開き、野球ボールぐらいの粒子の集まりが弾け、剣を構成していく。
それは両刃の大剣で、刀身は紫で、柄は黒。　大きさは兵器少女の背丈以上あるが、片手で軽々持ち上げて、ゆっくりとこちに向かって歩いてくる。
「そういうことですか？　それで勝ったつもりですか？　爪が甘いですわね、スイーツのように考えですわ」
大剣を斜めに力強く振り下ろすが、黒いミニドレスをはためかせ、軽く受け流される。
「残念でしたわね。このエクリプスはオレイカルコス製ですわ。そ

んなナマクラでは、傷一つつきませんわ」
　兵器少女とカサンドラが剣戟を繰り広げている隙にエロゲーを掴み、武器に変えることに集中した。　ジャンルによって武器の形状が決まり、武器の効果を変る。
　俺が手にしているのは陵辱系、効果は服従で、形状は刃渡り五センチぐらいの短剣で、材質はヒヒイロカネ。エロゲーが短剣へと変えていく。　両刃で細身の刀身は闇夜の中でも煌々と輝く緋炎。それが自分の身に宿した力。
　短剣を正眼で構えて地面を蹴ってカサンドラと間を詰め、スピカの援護もあり、頬を切り裂くことに成功した。そして効果が発動する。
「油断したな」
　カサンドラの動きがピッタリと止まる、これが俺の力だ。
「何をしたのですか、身体が動がまったく動きません。これはどういうことですか」
「今だ、トドメをさせ」
　相手の動きを数分しか止めることしかできない。これも俺っちがこの力を完全に把握していないからだ。もって一、二分だろう、だから彼女にトドメをさしてもらうことしたのだ。
「いちいち私に指図するんじゃないわよ、それくらいわかっているわ」
「や、止めろ――――」
　エメラルドグリーンの瞳が冷たく光り、迷う事なく斜めに勢いよく振りおろされる、　カサンドラの身体はから血が噴き出し、黒のミニドレスは引き裂かれ、地面を赤く染める。
「やったのか？」
「イヤ、逃げられたわ。手傷を負わせることはできたけど」
「えっ！　どうやって逃げたんだ」
「それは簡単よ。其方の想像以上に彼女の力は強力で、其方の力は未熟だというだけのことじゃ」

「俺っちの力は、ものの数秒しか効かなかったということか」
「そういうことじゃな、この未熟ものめで、うつけ者め。あと契約について伝えておかなければならいないことがいくつかある」
「簡潔に説明してくれ」
「其方の身体に某の血が馴染むまでおよそ三日。七十二時間ね。それが過ぎたら二十四時間以内に某の血を飲まないと其方は死ぬことになる」
「それはどういうことだ」
「契約の対価じゃ、驚くほどのモノではないだろう。あと某の血を飲むことで繋ぎりが強くなる。もはや某と其方は一心同体なのじゃ。記憶の共有に感覚の共有。其方が傷付けば、某も傷付く、もはやと某は離れられない。どこにいても繋がっているのじゃ。
それが血の契約……某とパートナーを組むということ、そして力を得るということじゃ。
契約を終わらせるには、某の願いを叶える……それしか方法はない。
其方に選択の余地などもはやない。
さあ、某ともに生きましょう。　世界が終わるまで、ずっと、ずっと一緒にいましょう」
（ふざけるな……俺は、まだやることがあるだ）
などなどと思ったがとりあえず、短剣をエロゲーに戻し、散らばっているエロゲー紙袋に戻し、大急ぎで逃げようとしたが遅かった。巡回お巡りさんに捕まってしまった。罪名　幼女誘拐および強制わいせつ。もちろん無罪を唱えた。だが誰も信じてくれなかった。
みんな口をそろえて『あいつならやると思ってたよとか、イカレタ野郎だからとか』、他にもこんなことを言っている奴もいた。『ローリコンだからな、絶対やると思ってたよ』みんな好き勝手いってくれる

第6話

飾りっけもなく、だった白だけの無機質な部屋。
そこにぽつんと、鳥カゴがある。鳥カゴと言っても人間が一人丸ごと入れる大きさだ。
その中で一人の少女が泣いている。目は赤くはらし、喉もかれている。もう永い時間泣いているみたいだ。少女の背中には翼があった、白く綺麗な翼だ。もしかしたら、少女は天使なのかもしれない。決して比喩ではない、それくらい美しかった。
少女はある男の子を思い出していた。とても優しい人のことを――
見ず知らずの言葉も通じないわたしのことを気にかけてくれた――とても優しい人である。名前も知らないけど、その顔はわすれない。もう会う事ができなくても。
鳥カゴの鳥は決して外にでることはできないから。
アレは淡い夢でうたかた。でも決して忘れることはできない大切な思い出。
あの子はわたしのことを覚えているだろうか？　もし覚えていてくれたら嬉しいな。
ああ、会いたよ。会いたよ。

地面が涙で濡れていた、何で俺っちは泣いているんだ。何か夢を見ていた気がするがよく思い出せないが、始まりの書は黄金に色に輝いてた。俺っちの手元に残ったのは始まりの書だけである。他は全て取り上げられた。なぜ始まりの書だけ残ったかわ――秘密である。拘置所で迎える朝はとても寒い。そして俺っちの身に何が起きたのかを思い出し、愕然とする。
捕まったんだけ。そんな嘆き悲しんでいる時に、怪しげな神父が面会にやって来た。

もちろん知り合いではない。無神論者だ、教会なって一度もいったことないし、教会関係者に知り合いはいない。
「お礼を言いに来たんですよ。スピカを助けてくれてありがとう」
感謝の言葉を述べているのに表情一つ変わらない、のっぺり顔の男。服装は紺色のスーツに首から十字架を下げている。髪は綺麗に整っており、ほんとうに特徴らしい特徴のない男だ。
「なんのことを言っているのか？　俺っちにはわからない。スピカ、それは誰だ」
「キミが捕まる前に助けた蒼髪少女のことですよ。我はその子の保護者みたいなものです」
「お礼は言葉より、俺っちの無罪を証明してくれた方が嬉しいです」
「もちろん、そのつもりできました。ただし一つ条件があります。何、簡単なことです」
何も書かれていない白い仮面を張り付けたような顔で言われると、物凄く怖い。
「俺っちにできることなら何でもします」
「娘の恩人ということでいろいろと調べさせてもらいました。特殊な環境で育ったようですね。しかも始まりの書を所有しているとか？　実に面白い話ですね」
「神父さまは一体何者なんですか。なぜ俺っちのことをそこまで知っているですか？」
「娘の恩人でも、それはお答えすることはできませんね。ただ貴方の敵ではありません」
「それで俺っちは何をすればいいんですか？」
「娘を助けて欲しいですよ、貴方は娘と契約したんでしょ」
「まあ、成り行きでしましたけど、後悔はありません。魔法少女との契約は王道ですからね。もちろん助けるつもりですよ」
「ありがとうございます、断られたどうしようかなと思ってました。貴方を証明するものは、全て消去しましたから」
「消去？　それはアレか？　捨てられたということか」

「少し違いますね、存在した痕跡を消したのです。簡単に言うと『過去改変』ですね、はい、だから捨てられたではなく、忘れられたです、世界に」
「そんなことが本当にできるのか？」
「出来ますとも、それが組織の力です。そして今日から貴方も組織の一員です」
「ちょっと待ってください、スピカとか言ったか、あの子は守る。だけど組織に入るとは言ってません」
「それは困りましたね、貴方の存在は全て消してしまいましたしね。組織に入ってもらわないと我の立場がないんですよね。考え直してくれませんかね」
「それはできない」
「死ぬということですね」
「なぜ俺っちが死ぬ、貴様が俺を殺すのか」
「お忘れですか？　貴方は娘の血を飲まないと死ぬですよ」
「ああ、そのことか？　血が身体に馴染むまであと二日、確かにあまり時間はないな」
「どうしますか？　ここで死ぬにますか？　まあ一様娘の恩字ですから、丁重に埋葬してあげますよ。だから安心して、死んでください。」
「少し考えさせてくれ。すぐには答えを出せない」
「仕様が無いないですね。あと、アニメの映像記憶チップやらマンガや、ラノベ、フィギュアや、エロゲーなどのオタクグッズに、着替え類は、我々組織が預かっている。返して欲しければ、組織に入ることだ。
では明日また来ますね。それまでに考えてください。貴方に残された時間は……もうわずかですから、いい返事を期待してます」
「わかりました」
「では、これで失礼します」
「いろいろとありがとうございます、ではまた明日」

そして神父と別れて面会所を後にした。
神父の話を断っても地獄、乗ってみても地獄だろう。
どっちを選んでも地獄だよな。なら、神父の話に乗ってみるのも悪くないのかもしれない。あの子にもう一度会いたいしな。何て言っても魔法少女だしな、守ると誓ったからな。オタクグッズというか――――シリアちゃんグッズは返してほしいな。もう手に入らないプレミアムものあるからな。
まあ、ここに行っても死だけだしな。しかし、存在消えたと言われてもいまいち、ピントこないな。まあ、迷う余地なんてないだけどね？　こんな俺っちを必要としている人がいるんだから。その人の役に立つことができるだけで幸せなはずだ。
よし、明日ちゃんと答えよう。今日はもう寝よう、いろいろと考えたら疲れちゃった。

「おはようございます。決心はつきましたか？」
「組織とやらに入ってやる、だから早くここから出せ」
「わかってくれました、ありがとうございます。娘をよろしくお願いします。あとこれはスピカを助けてくれた謝礼です。どうぞお納め下さい」
小麦色の封筒を押しつけてくる。中には十万ほど入っていた。
「こんなにもらえませんよ」
高校生の自分が貰うには少し大き過ぎる金額だった。
「受け取ってください、ほんの気持ちですから。それに生きていくために金は必要です」
「わかりました。大切に使わさせていただきます」
「あとオタクグッズやら、着替えは教会の宿舎の方に送っておきますから安心してくださね」
「いろいろとお世話になりました。ありがとうございました」

拘置所を出た俺っちは、神父の紹介でとある教会に厄介になるこ

とになった。
　そこは教会というよりも神殿と言った雰囲気の建物だった。巨大で立派な石組みの教会。デザインはたぶん、イギリスとかにある大神殿だろう？　まあ写真でしかみたことのない建物だ。石畳の教会を見るのはこれが初めてで目を丸くした。

　扉を開けた先は礼拝堂になっていた。石組みの壁にタイルの床、豪奢なステンドグラス、列をなす長椅子に立派な内陣、十字架にかけられた救世主の像……どれも、西欧の歴史ある教会を思わせた。
　教会という場所に来るのは、初めてだったが、思わず息を呑んだ。異世界に迷い込んだと錯覚するほど、中は広く美しかった、それに空気もたいへん澄んでいて清々しい気持ちになった。
「申しぃ訳ございません。ここは関係者イガイ立ちり禁止になっておりますぅ」
　紺の修道服を着た、二十代後半と思しき女性が声をかけていた。とても落ち着いた雰囲気を纏った、修道服の非常に似合う女性。
「俺っちはシリウス神父の紹介できたものです」
　金の瞳を瞬かせ、納得したよう顔で手を叩き。
「ああ、アナタが……ハイ、話は聞いていますぅ。スピカさんのオンジンで、確か天海翼さんですねぇ」
「はい、そうです」
「わたしぃ、シスターカレハといいますぅ。立ち話も何でしょう、食堂まで案内しますぅ」
　四十五度の綺麗なお辞儀に、爽やかな笑顔。差し出された手には白い手袋がしてあった。その手を握りしめ俺は軽く頷いた。手袋越しとはいえ、女性と手を繋ぐのは恥ずかしいものだ、少し頬を赤く染めていた。
「こちらが食堂ですぅ。何か呑まれますか？　紅茶とコーヒー、それとウーロン茶がありますぅが、どれになさいますか？」

「では、コーヒーを」
「ブラックでよろしいですぅか？」
「ミルク一つと、砂糖なしでお願いします」
「ハイ、かしこまりました。少々お持ちくださいませ」
綺麗に腰を三十度に折り、あざやかな笑みを浮かべ、コーヒーを入れに向かった。
残された俺は辺りを見渡す、天使の絵が描かれたステンドグラスに、シャンデリア。長机に引かれた真っ白なテーブルクロス上に置かれたロウソク、あと宗教画も幾つか飾ってある。待つこと数分で戻ってきた。
「熱いのでお気よつけてお飲みください」
テーブルの上にそおっと置かれる二つコーヒー。ミルクがたっぷり入ったコーヒーは彼女が飲むのだろう。
「ありがとう」
向かいの席に着き仕事の話が始める。その場の空気がらりと変わった気がした。
「アナタにはスピカさんの護衛と、各地で起きている神狩りを調査してもらいたいのですぅ」
「それが仕事内容ですか？」
「ハイ、そうですぅ。やっていただけますか」
大人の笑みを浮かべ、艶めかしい声でお願いしてくる、その姿はまさに大人の女性と言った感じだった。
（いかにも怪しい仕事だ！　神狩りの調査か？　しかも報酬も高い。神父は死と隣り合わせの仕事だと言ってた。でも断ることはできない。断れば……務所……か）
「……は……い……」
肩を落とし、口を震わせ、力なく答えた。まともに彼女の顔を見ることができない。
「ありがとうございますぅ」
彼女の明るい声に対して、目線を反らしたまま、苦笑を浮かべて

軽く頷くことしかできなかった。
「では、宿舎にご案内しますので、わたしぃ後をしっかり連いてきてくださいねぇ」
「わかりました」
シスターカレハの後を歩くこと数分、古びた建物が見えてきた。
「こちらの建物の一〇五号室ですぅ。あとこれが部屋のカギですぅ、無くないようにしてくださいねぇ」
シスターからカギをもらい、宿舎の中に入って行く。
薄暗く痛んだ廊下は、所々穴があいており、壁には不気味な染みがたくさんある。月明かりを頼りに歩いて行く。どうやらこの廊下は円形になっているらしい。五部屋で、二階に向かう階段らいきものがみあたらない。外から見た感じ五階ぐらいまでありそうなのに、不思議な建物である。
とりあえず、自分の部屋に向かうことにした。
「ここか、一〇五室は」
ゆるやかに扉を開き、中を覗く。何もなかった、家具という家具がなかったが、思った以上に綺麗だった。白く真新しい壁に茶色っぽいフローリングで、埃一つなく、悪臭もしない。広さは四畳半ぐらいだろう。今日からここで生活することになるのか？
とはいえまだ荷物は届いてないみたいだな。
しかしお布団がないのは厳しいな、せめて毛布一枚ぐらいは欲しい。凍え死んでしまう。マジで――――よし決めた、シスターに話して毛布を借りよう、そう思い経ち、教会に向けて歩きだす。

困った！　道に迷ってしまった。土地勘もなく、シスターの後を連いていっただけなので教会までの道がわからない。道を聞こうにも人影が見えない。完全に遭難してしまった。
（このまま、ここで野たれ死ぬのかな。どうしてこんな人里離れたところにあるんだろう）
見渡す限り木、鬱蒼と生えた木が見える。それ以外見えない。こ

の木の所為で方向感覚が麻痺する。冷たい風と木々のざわめきが体を震わせ、魔性の森に迷い込んだ気分になる。
辺りは暗く、月明りとおぼろげな記憶を頼りに教会への道を探す。
「きゃぁあああ――――」
女性の悲鳴みたいなものが聞こえてきて足がすくんで動けなくなる。
命の危険を強く感じた、ヤバイ！　マジでヤバイ！　この森で何かが起こっている。
（どうしよう、助けにいったほうがいいのかな）
そう思い、叫び声がした方に歩き出す。できるだけ静かに、物音をたてずに慎重に森の中を進む。
「この娘どうしますか、殺しますか。アニキ」
「イヤー、縄で縛おけ。もしもの時は、人質として使えるからな」
「わかりやした」
話し声が聞こえてきたので、こっそくり木の影から覗くと、ガラの悪そうな男達に少女が捕まっていった。数にして五人。捕まっている少女は、あの自称・兵器の魔法少女である。確か名前はスピカとかいったな。さらしで口を塞がれ手足は縄で縛られていた。
服装は大日本帝国海軍航空隊のモノだ。
『零戦』の名で知られる零式艦上戦闘機は海軍の戦闘機であり、航空隊の着用するを航空衣袴と呼ばれていて、布で作られていた。スピカが纏っているのは、上下ツナギ式で黄土色をしている。
アニキと呼ばれた男は、女子高生が持ってそうな、紺のナイロン製のうさぎのマスコット付いた、可愛らしいバッグを持っていた。たぶんスピカのものだろう。
なぜにバッグだけあんなに可愛いだろうか。実におかしいというか、アイツは、うさぎが好きだったのか？　驚きだ。
（とりあえず、助けないとまずいな）
「おい、そこで何をやっている」
「見てわからないのか？　お宝を頂こうとしているんだよ」

「やはり追い剥ぎだな、ということは悪だ。悪は許さない」
「正義の味方気どりの餓鬼が、いい気になるなよ。こっちには人質がいるんだよ」
スピカの喉元にナイフを突きたて叫ぶ、仲間の一人が殴り掛かってくるが、そのパンチをカンターで返す。まず一人。
「貴様、人質がどうなってもいいのか？」
「そいつが死のうと俺っちには関係ないことだ！　俺っちはただ悪が許せないだけだ」
「イカレてやがる。なら望み通り殺してやる、ざまあみやがれ」
スピカの首筋をナイフが綺麗に切り裂き、赤い血が噴き出すが、スピカは死なない、倒れいない。それぐらいの傷じゃびくともしない。スピカは人間ではないから――その姿を見て『バケモノ』と叫び蹴り倒すし、四人がかりで襲ってくるが一瞬で蹴散らし、悲鳴をあげながら逃げっていてしまった。

「大丈夫かい、すぐにほどいてやるからな」
口を塞いでいたサラシをほどいて、スカイブルーの綺麗な髪を優しくなでる。首筋の傷はもうふさがっていたが、服は血で汚れてた。
「はぁ～。服が汚れてしまったわ。また助けてもらったわね、ありがとう」
「お前意外と弱いだな、あとこれお前のだろう」
そっぽを向いてバッグを押しつける。縄はもうほどいてある。
「血、其方の血さえあれば、あんな奴等に遅れをとることはなかった」
バッグを受け取りながら皮肉言う。全く素直じゃないし可愛くもない。まゆ毛がよって、怒っているよにも見えるが頬は少しだけ赤い気がした。手を伸ばし立ち上がるのを手伝う。細く綺麗な手だった。
「俺っちの血じゃないとダメなのか？」
「一度契約を結ぶと契約者以外の血を飲むと死ぬだよ。そういう風

に私達は作られている」
「じゃあ今は、俺っちの血しか飲めないのか？」
「まあ、そういうことになるな」
まゆ頭を上げ、頬を赤く染め気恥かしそうに言うスピカは少しだけ可愛いと思った。手や足をもじもじさせ、可愛らしく身体をくねり、髪を靡かせる、その姿は絵になっている。俺っちの心を震わせた。
「なるほど、いろいろと大変だな！　ここで何をしてたんだ」
「其方には関係ないことだ。某は人に干渉されるのが嫌いなんだ」
突然怒りをあらわにするスピカ、表情がころころ変わるヤツだ。一緒にいても飽きないタイプだな。冷静に観察する、にしても俺っちには関係のないことだな。別に口出しするつもりもないしな、ここは一つ謝っておこう、ついでに教会の場所も聞く事にした。
「個人的問題に首を突っ込むつもりは別にない。言いたくないならそれでいい。あとお前、教会の場所わかるか」
「先から其方は偉そうだな！　某はお前という名前ではない。スピカだ。覚えとけうつけ者が！　教会の場所なら知らん」
「お前――――ここに住んでるじゃなのか？　なんで知らないんだよ」
「だから某はお前じゃない。スピカだ。知らないもは、知らないんだから仕方ないだろうが。うつけ者がっ」
「逆ギレかよ！　どうするだよ」
「某が知るか？　うつけ者」
「クソ！　ここのままここで話していても、埒があかない。空から探すぞ！　スピカ」
「其方は空を飛べるか？　凄いな！　某は飛べないぞ」
「俺っちだって――飛べるか？　貴様が俺っちを抱えて飛ぶんだよ」
「えっ！　どうやって」
「俺っちの血を吸って、空を飛べそなものを生成すればいいだろう」

「ああ、その手があったか」
「やっと気がついた。ホントバカだな」
「うるさい、さっさと血を吸わせ、うつけ者がっ！」
「はいはい、わかったよ」
「なんだ、そのなげやりな返事は？　其方は某に対する敬意が足りないぞ、うつけ者め」
「何でもいいから、早く吸えよ」
なんでコイツはいつも首筋を狙ってくるんだろう、出会ったときもそうだったな。たぶん深い意味とかないだろうな。バカだから――――まあいいけど、やっぱり、血を吸われるのは好きになれないな。痛いし、力が抜けていく感じがあるし、もうとにかく最悪な気分になるだよ。
「終わったか？　なら、早速生成頼むわ」
「そのくらい言われないでもわかっているわよ！　少し黙ってなさい、うつけ者」
　ツンケンしたい態度をとりがって、ツンデレでも目指しているのか？　今時流行んねえよ！　まあ、でも意外と可愛いな。これはこれでいいのかもしれない。決して嫌いではない。ほうきでも生成するつもりかな。でもただのほうきじゃ、空は飛べないような。やっぱり魔法のほうきかな？　それとも戦闘機だったりして、まあ、それはないかな～～～～
「なにっ！　ぼさっとしているよ、このうつけ者。できたわよ」
「翼か？　しかもハヤブサの翼。スピカ、良い選択だ」
「では、いくわよ！　しっかり掴まっていないと、振り落されてもしらないからね」
「これでいいか？」
「コラ、だからって抱きつくな、変態、ハレンチ小僧、うつけ者」
「無理を言うな」
「まあ、仕方ないわね？　でも変なことしたら、容赦なく落すから

な。いいわね、うつけ者」
「何もしないよ。たぶん」
「たぶん」
「何もしません」
「わかればいい、では行くとしよう。空の旅に」
空から辺りを見渡す。一面に広がる緑。この森はどこまで広がっているのか？　気になるが、今は教会を探すのが最優先事項だ。
「えっと、教会は――あった。意外と近くにあったぞ」

「シスターカレハ。毛布一枚貸してください」
「ええ、いいわよ。あそこはとても冷えるから。暖かくしないといけないわよね」
「ありがとうございます」
「あと必要なモノがあったら、スピカちゃんに作ってもらいなさい」

「でも、アレとても疲れるですよね」
「じゃあ給料が入ったら、家具とかそろえればいいわ」
「それまで我慢するしかないですね。ところで給料日はいつですか？」
「依頼達成後に渡しているわ、だからね、給料日とかはないの」
「そうなんですか？　わかりました」
「では、失礼します」

第7話

宿舎・自室。

スピカは一旦部屋戻り、新しい軍服に着替えてからきた。なんでも血のついた服のままだと落ち着かないらしい。俺っちもあまり血を見るのは好きじゃない。

「某の血も其方の身体に溶け込んできているようだな、そろそろ、本契約に入るか？　心の準備はできているか」

「契約って血を飲み交わすだけじゃないの？」

「まあ、アレは仮契約というか、時間が無かったんだ、しょうがないだろう、うつけ者」

「危機迫る状態だったからな、わかった。その本契約というのを結ぼう。俺ちの覚悟は遠の昔に決まっている。それにキミの血を飲まないと俺っちは死ぬだろう」

「そうだな、もう某の血は其方の身体に入ってしまったからな」

「拒否権何て最初から無いんだ。それにお前が気にすることない。これは俺っちの選んだ道なのだから」

「それでも、お礼を言わせてくれ、ありがとう。では、一言信義と呼ばれる誓いの儀式を行なう」

一言信義とは、武士に二言はない、その武士道の“誠”と同様。約束ごとに二言はなきようにという意味は合いの“信義”を合わせた誓いのこと。

まあ、平たく言うと、指切りと同じようなものだと考えていい。

「某の言葉に続いてくれ。

我、誓い立てし言葉、忘れることなかれ

汝、聞き届けし言葉、忘れることなかれ」

今度は俺がゆっくりと口を開き

「我、誓い立てし言葉、忘れることなかれ

汝、聞き届けし言葉、忘れることなかれ」

「我と汝、ここに結ぶ契り、互いに破(やぶ)ることなく、破られることなきよう努(つと)めるべし。
誓いに？偽りあれば、その不義に制裁をもって応じ、その命に鉄槌を振り下ろす。
我と汝、交わす言葉、これすなわち一言信義の契りなり」
綺麗な声が心に響く。
この後は確か、実際に誓う内容を言うんだったな……
「我、天海翼は、汝、スピカに誓う“キミと友達(パートナー)になる”と」
「我、スピカ、天海翼の誓い、聞き届けたり。これにて、一言信義の儀とする」
これで契約完了と

「大な魔力を感じたんで来てみて、正解だったわ。ついに見つけましたよ、アルネシアドール」
「また変なのが出った。コイツに出会ってから変な奴に良く会うようになったな」
まあ、退屈はしないからいいけどね。
白のロングケープに身を包んだ白人女性がそこにいた。金髪碧眼で、手に持っているのはレイピアか？　身長は俺より高いな？　たぶん百八十はあるな、しかも八頭身だ。胸はでっかく、魅力的だ、F、イヤ、Gカップはあるな。スピカにない魅力を持ち合わせた女性だ。まあ俺っちは貧乳派だけどね。
「マスターはどうした。なぜおまえここにいる」
「あなたと一緒に居た男でしたけ、知りたければ私の所に来なさい。そこはあなたの居る場所ではありません」
「ふ、ふざけるな。仲間などにはならん。某は貴様らがしたことを決して忘れない」
（スピカの様子が可笑しいな、震えているみたいに見えるし、何処か感情的で。声にも覇気がない）
「なぜスピカを狙う。一体何者なんだ」

「おっと。私としたことが……自己紹介を忘れていました。イギリスからやって来ました。アルネシアドール討伐部隊者の、名をメッリサ・リナルドと申します。別に覚えてくてもいいですから。貴方様はそれがどういう存在だか知っていらしゃるんですか？　世界を滅ぼすかもしれないほど恐ろしい兵器でございますよ」
「俺のパートナーを侮辱するな」
「決して侮辱ではございません。事実でございます。ご理解いただけませんか？　それはとても恐ろしい兵器でございます。地球そのものを壊しかねない力を持っているのでございます」
「コイツにそこまでの力があるとは俺っちには思えないがな」
「何も知らずに契約したのでございますか？　それの力は貴方様の手にあまるものでございます。一滴の血でドラゴンを生成した恐ろしい女なのございます。万物を創造する力、例外は無く、彼女は全てのモノを完璧に創造することができるのでございます。それが例えフィクションでも――――」
「スピカを手に入れてどうするつもりだ」
「世界平和のために役立てるつもりでございます。争いのない平和な世界で暮らしたいと思っているはずでございます」
「そのためにスピカが必要だと言うのだな」
「左様ございます。貴方様ではその兵器は手にあまると考えたからでございます。我々なら有効に使うことができるでございます。もちろんタダでとは申しませんでございます。一千万お出したいと思います、それだけあれば、再就職先も見つかると考えているからでございます」
「断る。いくらお金を積まれてもスピカは渡すつもりはない。貴様らがつくる平和にも興味はない」
「自分の身を心配しているなら安心してくださいでございます、契約解除の方法なら存じています。アルネシアドールを渡してくれたら教えてさしあげます。それが条件でございます」
「必要ない。契約したことは後悔してないし、自分の意思で決めた

ことだ。それにお前らは気に入らない。スピカをモノみたいに扱いやがって、そういう考えが一番嫌いなんだよ」
「姿こそ人間に近いでございます、それは紛れもなく兵器でございます、人間ではございません。そんなこともわからないのですか？」
「全然わからないよ。わかりたくもねえよそんなこと」
「どうしても、渡さないつもりでございますか」
「ああ、渡さない。絶対にな」
素早く背後にまわり込み、喉元にナイフを突き立ててくる。
胸が背中にあったているか、その感触を楽しんでいる場合じゃない。
「早く俺っちから離れろ、死ぬぞ」
「動くな、騒ぐなでございます、貴方様は人……」
だから離れろって言ったに、結局何も聞き出せないまま死にやがった、クソ。
「ねぇ！　何で死ぬじゃったの？」
（震えも止まり、陽気な声で訊いてくる。やっぱりコイツのことはわからない。何を考えているのか全く読めない）
「俺っちの身体から出た毒にやられたんだよ。俺っちの身体は少し特殊でな、抱きつた相手を瞬時に殺すことができるだよ」
丈夫な身体を手に入れた対価がこれだよ。おかげで異性と付き合うことできなくなった。
「で、この遺体はどうするの？」
「陽のあたりのいいところに置いとけば、自然消滅すぞ」
「マジでか」
「ああ、ホントだ」
「今日はもう疲れた、俺っちは寝る。お前も自分の部屋に帰れ」
「おい、待って！　其方は、大切なことを忘れているぞ。まだ某の血を飲んでいない」
そう言われて見れば、血を飲まないと死ぬだけ、忘れてたわ。
「わかった。飲むから準備してくれ」

血の入った銀の聖杯。
「早く某の血を飲め、死にたいのか？」
「それでは頂きます」
「苦い～～～」
「まあ、そのうちなれる」
「そういうもんかね」
（記憶が、ビジョンのようなものが見える。これが記憶の共有か？）

一面に焼け野原が広がっていた。無数の死体が転がり、血の臭い充満している。　ここが秋葉原であることに気付くのに数分の時間を要した。　人影が見えた。女性だ。二人いる。
一人はスピカで間違いないだろう。あの軍服には見覚えがある。もう一人は、成熟しきた、大人の女性だ。
でもどこか、あの少女に似ている。白髪に白肌でも傘は差してしない。たぶん陽が射していなからだろう。空は黒い雲で覆われていた。
「私のせいでまた戦争が起きた。多く人が死んだ。私が殺したんだ」

返り血で、白いドレスは赤く染まっていた。
「泣かないで、貴女せいじゃないわ。貴女の力を求める、貪欲な人間が悪いのよ。あんなゴミために泣く必然なんてないわ」
「私が殺した。私が殺した。私が殺したんだ。私を守るために多く血が流れた。私がいなければ、私さえいなければ、戦争は起こらなかった」
「お願い某の話しを聞いて、耳を傾け……自分をそんなに責めないで」
しかし、スピカの響きは少女には届かなかった。
そこまでだった、それ以上何も見えなかった
（今のは本当にスピカの記憶なのか？　何て悲しくて苦しい寂しい記憶なんだ）

「その恰好で寝るのか？」
「そうだけど、何か文句でもあるのか」
「別にないけど」
（寝巻姿も見たかったけど、まあいいや。軍服も似合ってるし）
「もう俺は寝るよ。スピカ、お前は隣の一〇四号室だろう」
「お休み」
スピカが部屋を出て行くのを確認して眠りにつくことにした。

「朝だ！　起きろ」
「まだ眠いよ、今何時だ」
「わかるか」
「時計ないんだけここ」
「朝食ができたらしい、食べに行くぞ」
「教会まで歩くのか？」
「ここの食堂で食べられる。黙ってついて来い」
「わかりました」
食堂は二階にあるらしい。またこの宿舎には階段というものがないらしい。では、どうやって行くのかというと、一旦外に出って梯子（はしご）を使って窓から入るらしい。まったく変わった入り方だ。
二階は食堂の他にお風呂や談話室があるらしい。

「なかなか美味しかったな！　いろいろと訊きたいことがあるんだが、訊いていいか」
食事を終えた俺達はとりあえず談話室でこれからのことを話すことにした。
「まずは私達の絆を深めましょう」
「某の名前はスピカ、其方の名前は？」
「俺っちは天海翼、一様お前の護衛だ。よろしくな」
「ええ、こちらこそ、よろしく」

「組織のことを教えてくれ」
「まあ単刀直入ね。でも某もそんなには知らないわよ」
「それでも構わない。知っていることを全部教えてくれ」
「わかった。教えてあげる、その代わり某の質問にも答えてね」
「ああ」
「世界規模の宗教組織なんですって。何でも人類が生まれる前から存在していたものらしいわ。組織の名前は不明、その目的も明らかになっていない」
「神狩りの調査することが目的じゃないのか」
「それは本来の目的を誤魔化すモノ。他にもいろいろとやっているわ」
「異世界の研究もやっているのか？」
「わからないわ」
「質問を変えよう、シリウス神父のことは知っているよね」
「ええ」
「一体何者なんだ」
「某の保護者で魔法術の研究者らしいく、あまたの魔法術を使うことができるわ。彼もアルネシア人で歳は不明。アルネシア人は長命なのよ。あとマスターの友人らしいわ」
「アイツは信用できるのか？」
「それはわからない。某もほとんど話したことがないから、でも悪い人ではないと思うの」
「そうか。今のところは様子見ということか」
「他に訊きたいことはある」
「今のところコレくらいかな」
「では某からいくつか質問させてもらうわね。答えられる範囲でいいから正直に答えてね」
「ああ」
「なぜここに来たの？　目的は何？」
「それはキミ会いたかったからというのもあるが、死にたくなかっ

たからかな、やっぱり」
「あの子ため？」
「あの子？　誰のことを言っているだい」
「気にしなで、今言ったことは忘れて」
「なんでだ」
「なんでもいいから、忘れなさい」
「わかった、そう睨むな、もう変な詮索はしない」
「ならいいです。其方、桜の息子らしいな。シリウスから聞いた時は、正直驚いた。だが某の眼に狂いなかったということだな」
「知り合いなのか？　母さんのことを教えてくれ」
「時期が来たら話そう。今はその時ではない」
「そうかよ？　話せないことばりじゃないか」
「まあ、そう怒らないでください。これが最後の質問です。其方として始まりの書とはなんですか？」
「この本は母の形見みたいなもので、とある少女から譲り受けたもので、どんな力を秘めているのか、まだではわからないけど、大切な本だ！　それだけは言える」
「わかりました。では、カレハに会いに行きましょう。教会までの道はもう覚えましたか」
「ああ、完璧だ。任せとけ」

第8話

教会・食堂。
「貴方達にはアキバに行ってもらうわ。そこで、萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査を行ってほしいですぅ」
「萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルですか？　それと神狩りとどんな因果関係があるんですか」
「コスプレ美少女に神を奪われたという報告がたくさんきているんですぅ。なんでもアルネシア神を崇拝する人が激減して堕ちた神が大量発生しているらしいんですぅ、原因は不明なんですぅ」
（神とは信仰心の塊だ。人が神を信じなくなってしまっては、神はこの世界に存在することができない。神が奪われるということは、信仰心を奪われると言うことになる。信仰心を失ったものは、生きる気力を失い廃人になると聞いたことがある。それでもし死人がでれば堕ち神が生まれる。堕ち神とは信仰心では萌えという感情を喰らいこの世界に存在することができるらしい。堕ち神が増えるということは、また暴動が起こり、戦争に発展することを意味していた）
「なるほど、それは一刻も早く原因を究明しなければいけませんね」
「ええ、確かに興味深いわ。もしアレが関わっているとしたら」
「神の石によって生み出されたアルネシアドールか？　確かにその可能性はあるな」
「時間が惜しいわ。もたもたしてないで、秋葉原に行きましょう」
「その前に一度部屋に戻ってみてほしぃ～の。シリウス神父からあなた宛てに荷物が届いているですぅ？　きっと役に立つはずですぅ～」
「はい、わかりました。では一度部屋に戻りますね、いくぞスピカ」
「ええ、某はここで待ってるわよ、準備ができたら声をかけて」
「わかったよ、独りで戻るよ。大人しく待ってるんだぞ、いいな」

「は～い」

宿舎・自室。

「え～と、神父からの荷物はこれか？　中身は着替え類やシリアちゃんグッズに、エロゲー、アキバの地図に、怪しげな魔術書。あとはケイタイ、ノートパソコンにリュック。それから意味不明なガラクタがたくさんか」

ノートＰＣもあること出しネットで調べて見るか？　頭に埋め込まれたＩＤチップを利用することで電話線を介さないで、ネットに接続することができる。しかも無料。

検索ワードは萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルでよしと。

え～と約三十九万六千件か？　意外と多いな。某掲示板だけざっと目を通しておくか？

なるほど神は無理やり奪っているみたいだな、死者も数人でているみたいだ。被害者の数も百人を超えているみたいだしな。このままほっとくと大変なことになりそうだな。

しかしこんなことができるのは教会の人間しか、考えられないけど――――糸が全くわからない。それに焔の言っていた堕ち神を根絶やし作戦というのも気になる。もしかしたらアイツが一枚噛んでいるのかもしれないが、確証がない段階では何とも言えない。まあ調べるのはこんぐらいにしておくか？　パソコンを閉じ。ケイタイはズボンのポッケトにしまい。エロゲーに地図と始まりの書はリュックに入れて、持って行くのはこれくらいかな。よし準備もできたし教会に戻るか。早く戻らないとスピカに怒られるからな。

教会に戻って見ると、白いセーラー服を着た少女がいた。

襟と袖口に紺色の三本が入っており、胸元のスカーフと下を合わせるスカートも紺で統一されてある。三つ折り白ソックスもあいまって鼻血を出しそうになった。

自然な美しさ。素朴で家庭的な安心感をかもしだす、和心だった。

「スピカちゃん可愛いでしょ！　さすがにあの格好じゃ目立ちますからねぇ、着替えさせたんですぅ」
（まあ、確かにあの軍服で街を歩いたら目立つよな）
「あとこれ――秋葉原で起こっている事件の詳しい資料よ。事件解決のために使って」
「ありがとうございます」
小麦色の封筒を受け取り、無くさないようにリュックにしまっておくことにした。
「あんまりジロジロ見るな、バカ、うつけ者」
「その服。超似合ってるじゃ、めっちゃくちゃ可愛いよ」
「そうか、まあ悪い気はしないな。でも某には少し可愛過ぎないか」
「そんなことないですぅ！　同性のわたしぃから見ても綺麗だと感じますぅ」
「でもこの格好で外を歩くのは、恥ずかしい」
（何故？　夏服なんだ！　今は冬だぞとツッコミを入れたいのに、言うタイミングがわからない。二人ともそのことに触れようとしていない。このまま外に出れば確実に目立つ）
「あらあら、それは困ったわねぇ。どうしましょう、ウフフフ」
「あ、あのちょっといいですか。その服装で外に出るのは止めた方がいいと俺も思います」
「やっぱり変か？　外に出ったら笑われるか？」
「全然変じゃないよ、すーんごく似合ってるけど――――」
「けど何だ。はっきり言ってくれ、頼む」
「それ夏服だよね。真冬に着てたら、多分目立つと思うだよね」
「そうなのか？　これは夏服なのか」
（えっ！　そこ、そこを訊くの？　どう見ても夏服だよね。生地が薄いし、半袖だし。間違いなく夏服だよね）
シスターに助けを持ってみるが、微笑んでるだけで何もしてくれない。
この人わかってやってる。絶対楽しんでる。

「まあ、なんだ……。露出が多い服は夏で、少ないのが冬服だ。覚えておけ」
「なるほど、露出が少ない服を着ればいいだな。じゃあ着替える必要なかったな」
「軍服もマズイ、というか、目立つ。そうだ！　トレンチコートを着ればいいよ。よし、それがいい」
「おお！　そうか、コートを着ればいいのか。カレハはトレンチコートを貸してくれ」
「ええ。いいわょ～」
「これで完璧だな」
セーラー服の上に紺のコートを羽織ったスピカが自信満々に言う。

「秋葉原を歩いても目立たないはずだ」
「ところ、其方は準備できたのか」
「ＯＫ」
「じゃあ、行くか」

アキバ・裏路地（ジャンク通り）
資料に書かれた事件現場に来ている。スピカに普通の女子高校生というものを一通り教えてあげたが、大半はウソである。なぜならば俺っちが知らないからだ。まあ大丈夫だろう。
「ここが事件現場か？　特に変わったことところはないな」
「魔力の残留を感じる、其方は何も感じなのですか」
「そう言われてもな、わからないよ。どんな感じだよ」
「形容しがたいですね、まあわからないならいいのよ。ここで何者かが、異能を使ったのは、まず間違いないようです」
「奴等が関わっているのか」
「その可能性は高いわね」
「お前は奴等の居場所とかわかるのか」
「魔力は感じないはこの辺りにはいないみたいなのよ」

「近づけばわかるのか」
「ええ、たぶんね」
「じゃあ、まずは情報収集と行きますか」
「ええ、それしかないみたいね」
シスターカレハから貰った資料には大したことがかかれてなかった。
事件現場と被害者の数。他には目ぼしい情報はなかった。

廃ビル、そこに伝説のハッカーいる。
仁科芳雄博士の優れた遺伝子を引き継いだ男。
強固なセキュリティも通用しない、世界の何処へでも潜入し情報を引き出すことができる。金では決して動かないが、女には弱いという噂。
アキバの都市伝説の一つ。

「その伝説のハッカーに会いに行くのか？　場所はわかっているんだろうな」
「ああ、俺っちのマブダチだからな。普段はジャンク屋で働いているんだ」
「其方の友達ということは……変態なのか？　同類なんですね、キモイですね」
「奴は確かに女好きだが、大丈夫だ！　俺っち以上に二次元信者だから、三次元の女は安全だと思う」
「損な以上なのですか？　それはいろいろと心配ですね。やはりここは別行動にするべきだと思います、其方はその友達から情報を聞き出すのよ、某は別ルートから調べるわ」
「え～～～スピカも一緒に行こうよ、きっと楽しいよ」
「イ～ヤ～なの～」
「何でだよ。伝説のハッカーに会いたくないのかよ。そしたらお前のマスターのこともわかるかもしれないだろう。会いたくなのか」

「会いたいの……でも……変態の所に行くのわ嫌なんです。だから其方一人で行け、変態、うつけ者」
「わかった、待ち合わせ場所は、ラジオ会館の前でいいな。あと時間は十七時」
「了解なのよ」
この女は一貫性なく、掴みどころのない性格だ。語尾もころころ変わるし、どんなキャラ設定になっているのか読めない女だ。

廃棄された雑居ビルは駅の裏手にある。街の灯りも届かない、闇の中にそれはある。
そこは昔、最先端技術を扱っていたが、現在は法律改正によって、禁止区に指定されいる。
そのため、立ち入り禁止エリアであるが――潜入は至って簡単である。なぜならば東京自体が隔離され立ち入りを制限されているからだ。
「ひさしぶりに来たが！　とても人が住める場所とは思えない」
部屋の一角からぼんやりと光が漏れている。

「白山（しらやま）、俺っちだ！　翼だ！　お前に訊きたいことがあって来た」
ブラックカーディガンに迷彩ミリタリーカーゴを着た男が姿を現した。どう見ても中年オジサンである。不精髭（ぶしょうひげ）にぼさぼさな頭。近いうちにハゲるな。お腹はもちろん出ている。相変わらず運動とかやってないんだろうな。引きこもって機械とかいじってるんだろうな。
「おお、来たか、待ってたぞ。立ち話も何だ、まあ中に入れ」
「ああ、そうだな」

部屋の中には所狭しと機械が置いてある。何の機械なのかはわからない。
「電気とか通ってるだよな、普通に。よく取り壊されなかったよな」

「コネだな。無理言って親父に頼んだからな」
「お前の父って確か『白山純』だよな。スカイブルーネット、バージョンイカロスの開発者にして、ネット魔術師と称される男だよな」
ターミエーターを観賞中にひらめいたと言われている。自我を持ったコンピューターで、東京全土を監視するために作られた。東京から出ようとする者を瞬時に殺し、手段は選ばないため巻き込まれる人多いと聞く。
また、政治、経済、宗教、世界構造を裏から操っているという噂もある。その力は東京だけでなく世界をも監視しているといわれている。その実態のほとんどがブラックボックスで、開発者の白山純にしかわからないプログラムで作られている。ネットの魔術師と揶揄されるだけあって、彼の登場でインターネットは格段に進化した。世界最大のＳＮＳ・セイクリッド。電話回線なしの高速インターネット。情報処理スピードとセキリティが格段に上がった。
スカイブルーネット、バージョンイカロス。謎の多いコンピューターだ。
「そうだけど。世間が騒ぐほど凄い男じゃないぜ」
「まあ、いいけど。そんなにココが気に入っているのか」
「秘密基地っぽくて、好きなんだココ」
「そんなもんか？　あと前来た時より機械類増えてないか」
足の踏み場もないぐらいに所々に機械が設置されていた。ここで一体何が行われているのだろうか？　パソコンに繋がれた無数のケーブルはなんだ。巨大なモニターみたいなものには、よくわからない数字の羅列が表示されてる、なにかのプログラムか？　怪しげな研究所を連想させるものばかりある。
「我輩にもいろいろとあったからな」
「おい、どうした。何でいきなり泣くだ」
目尻に涙を浮かび、突然泣きだした。今の話のどこらへんで涙腺にふれたというのだろうか？　まったく状況が飲み込めない俺っちを見て、白山が話し始める。

「この世からお前の存在が消えたかと思ったんだよ、本当に。捜したんだぞ、携帯に電話しても繋がらない。お前の家にいたら、ウチには子供はいませんとか、わけのわからないこと言われたしな。いくら我輩でも、お手上げで、どうしようか？　困っている時にお前から連絡があったわけだ」
「存在の痕跡を消したとか……言ったような気がしたな。よくお前は覚えていたな」
（白山の話を聞いて、唖然とした俺っちは軽く呟くことしかできなかった。手足も少し震えていた）
「選ばれた存在だからな、我輩には特殊な力があるだ」
「どんな力だ」
「それはな、機械とリンクする力だ」
「おお！　地味な力だ」
「地味じゃないこれは凄い力だ」
「どんな凄いことができるだ」
「ハッキングができる、あと機械と会話できる」
「ウィルスを流すとか機械類を操るとか出来ないのか」
「出来ない。だがバレずに情報を盗むならできる」
「相手に攻撃はできないのか」
「出来ない、やれば我輩が死ぬ」
（ほんとうに意味のない能力だな。そんな力を手に入れる前から凄腕のハッカーだったのに……逆にできることが減ったじゃないか？
　情報を盗むだけの能力てなんだよ。しょぼすぎだろう、機械と話せるからなんなんだよ。よくわかんない能力を手に入れたもんだ。まあ、人のことは言えないけどな）
「で、どうやってその力を手に入れた」
「それは教えられない。でも、今貴様ならおうよその検討はついているじゃないのか」
「雑談はこれくらいにして、本題に入るぞ。アキバで起こっている神狩りを調べているだが、知っていることがあたら教えてほしい」

「今、ネット上で人気のあの事件か。ああ、知ってるぜ」
「やっぱり知っていたか」
「だが、ただで教えるわけにはいかない、条件がある」
「何だ、俺っちに出来ることなら何で言ってくれ」
「お前のアルネシアドールをココに連れてくることだ」
「それが条件か？」
「ああ、そうだ。簡単だろう」
「貴様何を企んでいる」
「企む何て人聞き悪いこと言うなよ。興味があるだけだよ、お前が選んだおもちゃにね」
「その条件は飲めないな、スピカはココには連れてこない」
「なぜだ！　理解できない、それでは情報は手に入らないぞ、いいのか」
「ああ、それで構わない。一人で情報を集める、白山、お前の力は借りない」
「本気で言っているのか？　お前一人で何ができる」
「何だってできるさ、昔の俺っちとは違うだから」
「そうか、わかった。今度会った時は敵同士だな」
「ああ、そうなるな、じゃあ俺っちはもう行くよ」

第9話

翼が去った後、白山はあの日のことを思い出していた。
翼と神中と別れた我輩は、いつものメイド喫茶で一休みしたあとの帰り道、アイツと出会った。
駅の裏手の廃墟に入った時、血を流した人形にしか見ない女性を発見した。国籍はよくわからないが、顔だちからすると外国人のようだ。まだ若い。十代の顔立ちだ。足元には漆黒の剣が落ちている。この少女の持ち物でまず間違いないだろう。
短く切りそろえられた黒い艶のある髪に、ソフトエネラメル素材で統一されたミニドレス、ロングブーツ、ひじまで覆う手袋を身につけた女性は何者だろうか。動きやすく軽量された暗殺者みたいな服装……アキバでいた何が起こっているだ。
なんだか非常に、シュールな光景だなと内心で嘆きながら、少女の安否を確認するために近づく。
少女の身体には無数の傷があり、とくに酷いのは左肩から右わき腹までの斜めに付いた、切り傷だ。たぶん誰かに襲われたのだろう。幸い息はしているので生きといることだけはわかる。とりあえず、止血だけして、一旦家に連れ行こう。なぜ救急車を呼ばないのか、医者が嫌いだからだ。
自室に戻り応急措置終わえ、我ながら完璧だと自負するほどのできだった。あとは起きるのを待つだかだな。包帯でぐるぐる巻きにされた、ベッドの上でぐっすり眠る淫靡な女性を見て頷いた。
今居るのは研究所とは別の部屋である。研究所は五階にあり、今は二階の住居スペースに居る。この建物は十五階だてになっており、いろんな改造がほどこされている。防犯対策にはぬかりはない。
「ここは何処ですか」
「起きたか？　ここは我輩の隠れ家だ。我輩はキミの味方だ」
ベッドから起き上がおうとするから、我輩はとっさに叫んだ。

「コラ、動くな傷が開くだろう。　もうしばらく安静にしていろ」
「血、貴様の血をよこしなさい、血さえアレばこの程度の傷すぐに治ります」
「吸血鬼か？　驚いた、実在していたとは」
「吸血鬼などという低俗なモノと一緒にするな、殺されたいんですか？　私は生粋の魔女カサンドラですわ。覚えておいてくださいませ」
「魔女？　今時魔女はないな、我輩の血で悪魔でも喚起するのか」
「確かに私は数体の上級悪魔と契約をしているわ。魔女ですから、だがここでは喚起はしません。そんなことよりも早く血をください……」
　ヤバイ、傷がまた開きはじめている、包帯が真っ赤に染まっている。なんておびただしい、出血量だ。顔色も悪くなっている、このままほっておくのはマズイ。
「血を飲めば本当に傷が治るんだな。その後殺したりとかしないよな」
「命の恩字を殺すなど、そんな無粋なことはしません、私は高貴な人間ですから」
（何処をどう見ても人間には見えないが……たぶん人間なんだろう）
「わかった、早くしろ。だができるだけ優しく、痛くするな」
「いちいちとうるさい男ですわね」
　右中指を指し出して血を吸わせる。チクとする程度で想像していたよりも痛くなかった。
　ただ、淫靡な女性に指を吸われるというのはなんともエッチいものだ。思わず顔を赤くしてしまった。
「美味い、貴様。私と同じ高貴な人間だな」
「しがないジャンク屋ですけど、何か？」
「イヤ、何でもない。助かったとりあえず、礼を言うを。名前を何と言う」
　ベッドから起き上がり、我輩の方を向いて頭を下げる。何度見て

も美しい女性だと思う。
「白山辰五郎だ、覚えとけ」
「シラヤマタツゴロウか？　ふっ！　変な名前ですわね」
（イントネーションが少し違うがするが気にしないでおこう）
「今時辰五郎はないよな、確かに無いよな。何でも新門辰五郎にあやかっているだしよ」
「新門辰五郎か？　聞き覚えのない名前だ」
「江戸町火消しの元締だったらしよ。詳しくは知らないだけど……まあその先祖らしいだ」
「なるほどやっぱり、高貴な生まれだったらしいな」
「どこにでもあるジャンク屋だし、親はちょっと有名人だど、高貴とか全然ないと思う」
「高貴な人間ほどそれを誇らないものだ。気にいった力を貸そう。私に何か訊きたいことはあるか？」
「今、アキバで何が起こっているんだ、知っていることを全て教えてくれ」
「アルネシア杯、それは己が望みをかけた戦いであり、イヴという少女を巡る戦い。ここ秋葉原だけれなく、世界中でアルネシアドール同士の戦いが行われているわ。世界規模のバトル・ロワイアルの開催。ここ東京でも行われて……ぐはっ……」
「大丈夫か？　とりあえず横になれ」
　しゃべってる途中で吐血したやがった、まだ完全に治ってなかったみたいだ。俺としたことが油断した。カサンドラをベッドに寝かせ、手を優しく握りしめる。
「思った以上に傷が深いみたいね。体内にあるナノマシンもほとんど壊されて、治癒力が大分低下しているみたいね」
　薄笑いを浮かべ、弱々しい声で言ってくるので、握る手に力が入る。目尻が少し潤んできた。今にも泣きそうな面になる。
「キミを助ける方法はないのか？」
「一つだけあるわ、魔女との契約。契約することで体内のナノマシ

ンも修復されるはずよ。
　でも魔女との契約は命掛けのモノ。失敗すれば確実にぬわよ。それでもやる覚悟はあるのかしら？」
「魔女との契約、良い響きだ。もちろん契約するさ」
「じゃあ、まず魔法円を描きなさい」
「描き方がわからないな」
「私が教えてあげるわ」

「中央の魔法円を直径９フィート（一．八ｍ）で作る」
「ああ」
「外の円と内の円の間には、赤の蛇を描く。
　この蛇頭から尻尾に向かって、ギリシャ語の悪魔の名を書く。
　中心の正方形は、紫に近い鳶色で塗られ、中には“ｃｈａｏｓ”と書いておいて。
　四つの六芒星形は、赤色で塗る。
三角の部分には、“ＭＡＧＩＣＡ”と一文字ずつ書く。
　中央の六角形には、木馬を緑で描く。
　円の外の五芒星形は、赤で塗る。三角の部分には。“Ｔｅ，ｔｒａ，ｇｒａｍ，ｍａ，ｔｏｍ”　と分かち書きする。
　中央の五角形には、木馬を紫に近い鳶色塗る。
　全ての文字を黒で書く。これで完成だ」

「出来た。疲れた」
「あとは魔法円の中心に立ち、契約の言葉を承諾するだけです」
「汝、我との契約を望む者よ、我は汝との契約を望む。汝は強き者、誇り高き者。
　さあ、私の名前呼べ。それで契約は完了する」
「カサンドラ」
　叫び声とともに闇が現れた。闇は我輩を飲み込もうとするが、魔法円に阻まれて近づくことができないみたいだ。

（助かった）
「魔法円は正確に描けていたみたいだな。今からそれの対処法を教えてやる」
「それは助かる早く教えてくれ」
「自分の信じる正義をぶつけろ。そいつは正義とか、愛とかに弱いからな」
「我輩の信じる正義か？　それは萌だ。萌えこそが正義だ。くらえ萌え萌えパンチ」
拳が赤く光り、鋭くパンチをくりだし、闇を祓いおとす。
「何て強い思いの力だ。あんなにも強く輝いている」
「ふう～終わったか」
「ああ、無事契約は結ばれた。少し休ませてもらう、起きたら話の続きをしよう」
「我輩もくたくただ。今日はもう晩いし、話はまた明日だな。おやすみ」

翌朝。
「おはよう、よく眠れたか」
「おかげさまでゆくり休むことができました。ありがとうございます」
「それは良かったでは、昨日の続きを聞かせてくれないか」
ベッドからを起こし、俺は向かい側に椅子を置き、そこに腰をかける。
「私にも叶えたことがあるから。強い魔力を辿ってここに来たのです」
「なるほど、そうまでして叶えたい願いって何だ？」
「大切な人を冥界から取り戻すこと。そのために私は悪魔と契約して魔女になりました。でもそれだけでは彼を生き返らせることはできませんでした。だからこの大会に参加したのです」
「そうだったのか？　ところでアルネシア杯とは主催者は誰だ。ど

ういった目的でこの大会は開かれた。その糸がまるで読めない。アルネシアドール同士で戦わせて何を企んでいる」
「主催は教会の教皇ダフネで、その目的は唯一絶対神を創ることかな。そのため私達を戦わせようとしている。私達は元々そのために生み出された存在だから」
「教会、あの教会か？　世界規模のテロリスト集団。弱者救済を掲げているが、その実やっていることはテロ紛いの武力介入。そのためを多くの死者を出している。奴等が通ったあとには、草木も生えないという伝説の殺し屋集団か？　神の名のもとに戦っているが、奴等が信じる神はどうせ破壊神なんだろう」
「教会が信仰しているは、アルネシア。異世界の神で、この地球に平和をもたらす神だと言われています。そして神の声を聞くことができるが、巫女であるイヴです。そのカリスマ性でどんどん信者を増やしていると聞き及んでいます」
「なるほど。ところで、そのイヴという巫女は何者なんだ。我輩の情報網を持ってしても、その実体を把握しきれていない。その素顔を見た者は、堕ち神に心を喰われ、隷属すると噂も流れているほどの謎の多い人物だ」
「彼女とはよくわからないわ。ただ言えるのは、彼女が人間ではないということ。どちらかと言えば私達に近い存在ね。彼女もまた我欲の塊よ、聖女には程遠い存在ね」
「しかし、お前達は彼女を巡って戦っているんだろう。彼女にはそれだけの価値がある、違うか。だからこそ教会も彼女の力を利用している。そうなんだろう」
「その解釈で間違いないわ。そしてその力を十二分に引き出すには、虚飾虚栄者の力が必要だわ。虚飾虚栄者にはパンドラから引き継いだ力があるはずなんですわ。統一戦争で共に戦った数少ない仲間ですから」
「だから虚飾虚栄者を追いかけて、極東の島国まで来たのか？　カサンドラ」

「その通りですわ、虚飾虚栄者は鍵ですわ。森羅万象へ続く鍵。虚飾虚栄者の力無くして、私の願いは叶えられませんから。手傷は負わされましたが、おかげでわかったことがありますわ。虚飾虚栄者と一緒にいた、変態顔の人間方がパンドラの力を引き継いました」
「それは一体どういうことだ」
「私にも詳しい経緯まではわかりませんが。ブサ男から感じたのは、紛れもないイヴの力です。私にもイヴの血が流れているからわかります。あれは間違いない始まりの少女の力です。あと微かですが、契約の際に、虚飾虚栄者からも同じモノを感じましたわ」
「わかった、それがほんとなら、我輩も協力しよう。その人間の特徴を教えてくれ」
「高校生か？　大学生ぐらいで、よれよれのシャツによごれたズボン。見るからに不衛生な格好で、顔は気持ち悪くて良く覚えてないというか、思い出したくない。とにかく生理的に受け付けない、ブザイクな顔で……エロゲーを剣に変えるというキモイ能力を使うのが特徴ですわ」
「もしかしたら、こんな顔じゃなかったかな？」
　女性にそこまで言わせる男と言ったら、翼しか、思い当たらない。翼の写真を見せることにした。他にもキモオタはたくさんいるだけどね。淫靡な魔女を発見した場所も考慮するとね。やっぱり翼しか思い当たらないよ。
「コイツですわ！　間違いありません。この気持ち悪くて、不細工な顔ですわ、うぇぇぇ。虚飾虚栄者と一緒にいったキモ男ですわ」
「やっぱ翼か？　ちょっと携帯に電話して見るよ」
「おかしいな繋がらない。ちょっと家の方まで行ってくるから、ここで待ってくれ」
「たぶん無駄でしょう。行くなら止めませんが」
「よくわからないが、翼を連れてすぐに戻って来るからな。大人しく待ってろ」

数時間で帰宅する。
「あのやろう、どこにもいなかった。原因はわからないが、何者かに存在自体が消去されたみたいだ」
「やはり組織の手が回っていたのですわね？　相変わらず仕事が早いことですわ。では、キモブサを見つけ出すのはもはや不可能ということですか」
「ああ。いくら我輩でも痕跡が全くないじゃ、捜しようがない」

回想終わり。まあ翼には会えたけど肝心のスピカちゃんには会えなかったのは残念だな。でも発信器と盗聴器はうまく仕掛けることができた。
発信器からでる電波を見れば奴が何処に居るのかすぐにわかる

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3035z/

虚飾虚栄者は独よがりのうつけ者と契約しました

2011年12月11日19時48分発行